

愛知県立大学付属図書館蔵

慶長書写『平家物語』翻刻 卷第十一

近藤 政美

本稿は愛知県立大学付属図書館蔵の慶長書写『平家物語』（巻第十一）の本文を翻刻したものである。

本書の整理番号は、貴913・4-45、一二巻中の一一巻（巻第三を欠く）、巻第四以降の末尾に「喜福内匠助、慶長拾年八月吉日」という識語がある。

凡例

- 一 原本を忠実に翻刻することを期した。
- 二 丁数は本文の始めを一とする。各丁の表裏の初めに丁数とオ（表）・ウ（裏）、各行の初めに行数を記す。
- 三 目次には、前項にしたがって、丁・表裏・行を補う。
- 四 句読点は記されていない。便宜上、添える。
- 五 朱で記された振り仮名・捨て仮名・濁点・校異の語句などは、

本文の右傍に記す。

- 六 見せ消ち・書き損じなどの文字は、右肩に*印を付す。
- 七 補われている文字は、補入すべき箇所を○印で示し、その右傍に記す。

八 漢字は、印刷の便宜上、現代通用の字体（常用漢字体）・JIS漢字体などに改めたものもある。

例 舵 ↓ 舵、 憫 ↓ 慰、 頸 ↓ 頸、
處 ↓ 処、 躰 ↓ 体、 、 ↓ 候、

九 変体仮名・合字も現代通用の字体に改める。

例 𪛗（里）↓り、𪛗（阿）↓あ、𪛗（多）↓た、
𪛗（帝）↓て、𪛗 ↓ トモ、𪛗 ↓ シテ、

一〇 誤字の訂正は、本行の文字の右傍、または振り仮名の次の括弧内に示した。

例 表 アフレ(下二合れ)、千色チイロ(巻)、

平家十一卷之目録

『平家物語』諸本の略号

- 1 高 | 高野辰之氏旧蔵本(通称「高野本」、東京大学国語研
究室蔵)
- 2 竜 | 竜谷大学付属図書館蔵本
- 3 米 | 米沢市立図書館蔵本
- 4 内 | 内閣文庫蔵本
- 5 下 | 下村時房刊本(大東急記念文庫蔵)

一	逆櫓	・ ・ ・ ・ ・	一才2
二	大坂越(勝浦)	・ ・ ・ ・ ・	七才7
三	屋嶋軍(継信最後)	・ ・ ・ ・ ・	十四才4
四	那須与一	・ ・ ・ ・ ・	二十一才6
五	弓流	・ ・ ・ ・ ・	二十五才2
六	志渡合戦	・ ・ ・ ・ ・	三十才7
七	鶏合	・ ・ ・ ・ ・	三十六才1
七 ^(マ)	壇浦合戦	・ ・ ・ ・ ・	三十六才1
八	遠矢	・ ・ ・ ・ ・	四十二才8
九	先帝身投	・ ・ ・ ・ ・	四十七才4
十	能登殿最期	・ ・ ・ ・ ・	五十才5
十一	内侍所都入	・ ・ ・ ・ ・	五十六才2
十二	一門大路的渡	・ ・ ・ ・ ・	六十一才5
十三	鏡	・ ・ ・ ・ ・	六十六才1
十四	文沙汰	・ ・ ・ ・ ・	六十九才1
十五	副将	・ ・ ・ ・ ・	七十一才8
十六	腰越	・ ・ ・ ・ ・	七十七才3
十七	大臣殿被斬	・ ・ ・ ・ ・	八十三才1

一オ1 平家物語卷第十一

逆櫓 一

- 2 ○元暦二年正月十日^{ノ日}の日、九郎大夫判官義経院参して、大藏卿泰経朝臣をもて奏聞せられけるは、「平家は神明にも被^{ハナ}放奉り、君にも被捨まいらせて、帝都を出、浪の上に漾^{タノヨウ}落人^{ヲチウト}となれり。然を此三ヶ年か間不責落^{メサ}して多^タの国々を被^{フサケ}塞事^{ラル}、口惜候へは、今度於^{テハ}義経^ニ鬼界・高麗・天竺・震旦までも、平家を攻
- 一ウ1 落さらん間は、王城へ不^ル可^レ帰^ル由、奏聞せられたりければ、法皇大に御感あて「相構^ヘて夜を続^チ日^ニて勝負を決すへし」と被仰下。判官宿所に帰^ッて東国の侍共に向て宣ひけるは
- 5 「今度義経院宣を承て鎌倉殿の御代官として平家を可^メ攻^ス亡^ス。陸は駒の足のかよはんを限^リ、海は櫓舵^{ロカイ}のたゝん所迄可^ニ責行^ス。少も
- 8 子細を存せん人々は是より鎌倉へ早^ウく可^ク
- 二オ1 被^レ帰^ル」とこそ宣けれ。去程に八嶋には隙行駒の足疾^{ハヤク}して、正月もたち、二月にも成ぬ。春の草
- 3 くれて秋の風に驚^キ、秋の風歇^ツて、又春の草

- 4 になれり。送迎て既^ニ三年に成にけり。去程に
- 5 平家讃岐八嶋へ渡給て後も東国より荒
- 6 手の軍兵数万騎都に付て、攻下共聞し。
- 7 又、鎮西より、臼杵・戸次・松浦党同心して押渡
- 8 共聞えけり。彼を聞、是を聞^キにも、唯驚^レ耳肝
- 二ウ1 魂を消^スより外の事そなき。女房達には女院
- 2 北政所、二位殿以下の女房達、よりあひ給て、「我方様にいかなる憂目をかみんすらん。いかなる憂
- 3 事をか聞すらむ」と歎あひ悲しみ表^{アワレ}けり。新
- 5 中納言知盛卿の宣けるは、「東国・北国の凶徒
- 6 等も随分蒙^ニ重恩^ニたりしか共、忘^レ恩、変^{シテ}契^ヲ頼
- 7 朝・義仲等に随き。西国とてもさこそはあらん
- 8 すらめと思しかは、只都の内にていかにもならせ
- 三オ1 給へとさしも申つる物を。わか身^ツの事ならね
- 2 は心弱^{ヤカ}あくかれ出て、今日はかゝる浮目をみる口
- 3 惜さよ」とそ宣ける。誠に理りとおほえて
- 4 哀也。去ほとに、二月三日の日、九郎大夫判官義
- 5 経、都を立^テ、摂津国渡辺より船そろへして
- 6 八嶋へ既寄^リとす。兄の三河守範頼も、同日に
- 7 都を立て、是も摂津国、神崎より兵船を揃

8 て山陽道へ趣とす。同十日、伊勢・石清水へ官幣使を被立。「是は主上并三種神器事ゆへ

三ウ1 なふ都へ帰入可奉」由、神祇館官人、諸社司

3 本宮・本社にて祈誓可申由仰下さる。同十六日、

4 渡辺・福嶋両所にそろへたりける舟共の纜

5 既欲解。折節北風木を折て烈吹ければ

6 大浪に舟共打損さ、れて不及出。其日は修理

7 の為に留め。渡辺には、東国の大名・小名寄合

8 給て「船軍の様は未調練。いかゝすへき」と評

四オ1 定す。梶原申けるは、「今度の合戦には、舟に

2 逆櫓をたて候はや」。判官、「逆櫓とはなんぞ」。梶原、

3 「馬はかけんと思へは懸、ひかんと思へは引、弓手

4 へも馬手へも廻しやすふ候。舟は左様の時

5 きとをしまはすか、大事に候へは、舳艫に櫓を

6 たてちかへ、わいろを入て、となたへも安ふをし

7 廻すやうにし候は、や」と申たりければ、判官、

8 「先門出のあしきよ。軍には一引もひかしと

四ウ1 思ふたにもあはひあしければ、曳はつねの習

2 也。ましてさ様に逃儲したらんになしかはよかる

3 へき。殿原の舟には逆櫓をたてう共、かへ

4 さま櫓をたてう共、百丁千丁もたて給へ。

5 義経は只もとの櫓にて候はん。」と宣は、梶原重て

6 申けるは、「好大將軍と申はかくへき所をかけ、

7 引へき処をは引、身をまたうして敵を亡

8 を以好大將軍とはする候。さやうにかたをもむき

五オ1 なるをは猪武者とて好にはせず」と申は、判官、

2 「猪・鹿は不知。軍は只平攻に攻て勝そ心ちは

3 好」と宣へは、東国の大名・小名、梶原に恐

て高

4 くはわらはね共、目引鼻引、きゝめきあへり。其

5 日判官と梶原と、とし軍既せんとす。され共

6 軍はなかりけり。判官、「舟共の修理して、新う

7 なたるに、「各一種一瓶して祝給へ、殿原」とて宮

8 様にて、舟に兵糧米積、物具入、馬たてさせて、

五ウ1 「舟とふ仕」と宣へは、水手梶取共申けるは、「順

2 風ては候へ共、普通に過たる風にて候。沖はさそふ

3 るて候らん」と申ければ、判官大に怒て、「沖に

4 出ぬる舟の風こはければとて留るへきか。

5 野山の末て死、海河におはれてうするも、

6 皆是先世も宿業也。向風に渡らんとい

7 はこそ僻事ならめ。順風なるか少こはけ
 8 れはとて是程の御大事に舟不仕とは争
 六才1 申そ。船とう仕れ。不仕はしやつ原共一々に射
 2 ころせ、者共」と宣は、奥州の佐藤三郎兵衛嗣
 3 信、同四郎兵衛忠信、江田源三、熊井太郎、武蔵
 4 房弁慶なと片手矢はけて、「御説であるそ。
 5 舟とう仕れ。仕らすはしやつはら一々に射こ
 6 ろさん。」とて馳廻間、水主・楫取共「射殺れん
 7 も同事、風こはくははせしにも死や、者共」
 8 とて、二百余艘の中より只五艘出てそ馳
 六ウ1 ける。五艘の舟と申は、先判官の舟、田代冠
 2 者の舟、後藤兵衛父子、金子兄弟、淀江内忠
 3 俊とて舟奉行の乗たる舟也けり。残りの
 4 舟共は、梶原に恐るか風につるかして、出さり
 5 けり。判官、「人の出ねはとて留るへきに非ず。
 6 たゝの時は敵も恐て用心すらん。かかる大風・
 7 大浪に、思もよらぬ所へ寄てこそ思ふ敵をは
 8 うたんすれ。」とそ宣ける。判官、「各の舟に簣な
 七才1 ともひそ。火数多みえは、敵も恐て用心してす。
 2 義経か舟を本舟として、ともへの簣をまほれ」

3 とて終夜渡るほとに、三日に渡る所を唯三
 4 時計に渡けり。二月十六日の丑刻に摂津
 5 国渡辺・福嶋を出て、明る卯刻には阿波の
 6 地へこそ吹付たれ。

勝浦 二

7 ○明ければ、渚には赤旗少々ひらめいたり。判
 8 官、「すはや、我らかまうけをはしたりけるは。渚
 七ウ1 ちかふなて馬おろさんとせは、敵的に成ていら
 2 れなんす。渚へ不付先に、舟共踏傾く馬共
 3 追下く、船に引付く泳かせよ。馬の足立鞍
 4 つめひたるほとにもならは、ひたくと打乗て懸
 5 よ、者共。」とそ下知せられける。五艘の舟に兵糧
 6 米積、物具入たりければ、馬只五十余疋そ立
 7 たりける。如条渚近ふ成しかは、舟共踏傾く
 8 馬共追下く、船に引付く、泳かす。馬の足
 八才1 鞍つめひたる程にも成しかは、ひたくと打乗
 2 て、判官五十余騎おめいて先をかけ給へは、
 3 渚に百騎計ひかえたる兵共しはしもたまらず
 4 二町はかりさと引てそのきにける。判官渚に
 5 うたて馬の息休ておはしけるか、伊勢三郎

6 義盛を召て、「あの勢の中にさりぬへき物や

7 有。一人具して参れ。尋へき事有」と宣は義

8 盛畏承て、只一騎、百騎計か中へ懸入て何とか

八ウ1 云たりけん、年の齡四十計なる男の、黒皮威

2 の鎧きたるを、甲ぬかせ、弓の絃弛させて具て

3 参たり。判官、「あれは何者そ」と宣へは、「当国住

4 人、坂西近藤六親家」と名乗申。判官、「何家

5 にてもあらはあれ、是より八嶋の案内者にくせん

6 するそ。しやつに目なはなひそ。物具なぬかせそ。

7 逃て行は射殺せ、者共」とそ下知せられける。

8 判官親家を召て、「是をは何と云そ」と問給へは、

九オ1 「勝浦候。判官笑て、「色代な」と宣は、「一定かつ

2 うら候。下藺の申安まゝに、かつらと申候へ共、

3 文字には勝浦と書て候」と申。「是聞給へ、殿

4 原。軍しに向義経か、勝浦に付目出さよ」とそ

5 宣ひける。判官、近藤六を召て、「此辺に平家

6 のうしろ矢可射仁は誰か有」。「阿波民部重能

7 か弟、桜間介能遠とて候」。「いさゝらは、けちらし

8 てとをらむ」とて、近藤六か勢百騎計が中より

九ウ1 馬や人をすくて三十騎計、我勢にこそ具

2 せられけれ。能遠 能遠か城にをしよせて見

3 給へは、三方は沼、一方は堀也。堀の方よりをし

4 よせて時をとゝそつくりける。城の内の兵共、矢

5 先を揃てさしつめ引つめ散ぐに射けれ共、

6 源氏の兵共是を事共せず、甲のしころをかた

7 ふけ、堀をこえ、おめき叫て攻入けり。能遠叶

8 はしとや思劔、家子・郎等共にふせき矢射させ、

十オ1 我身は究竟の馬をもたりければ、それに打

2 乗て希有にして落にけり。判官ふせき

3 矢射ける兵共廿余人か頸切懸、軍神に

4 祭り、悦の時をつくり、「門出よし」とそよろこは

5 れける。判官、親家を召て、「是より八嶋へはい

6 く日路そ」と問給へは、「二日路て候」と申。「当時八

7 嶋に勢いかほと有らん」。「千騎には過候はし」。

8 「なとすくなひそ」。「か様に四国のうらく嶋くに

十ウ1 五十騎百騎つゝさしをかれて候。其上、阿波民部

2 重能か嫡子、田内左衛門尉教能は、伊与河野

3 四郎か召共まいらぬを攻とて、三千余騎て

4 伊与へ越て候」と申す。「扱はよひ隙こさんなれ。敵

の

5 不^ス聞先に寄よや」とて、懸足になつ、あゆませつ、
 6 馳つ、ひかえつ、阿波と讃岐の堺なる大坂越と
 7 云山を、よもすからこそ被^レ越けれ。其夜の夜半
 8 はかりに、判官、たて文もたる男に行逢たり。此
 十一才1 男、夜の事ではあり、敵とは夢にも不^レ知、御方
 2 の兵共の八嶋へ参とや思劍、打解て物語を
 3 そしゐたりける。判官、「是も八嶋へ参るか、案内
 4 を不^レ知そ。しんしよせよ」と宣は、此男、度々参
 5 て案内能存知して候」と申。判官、「其文は何く
 6 より何方へまいらせらるゝそ」と宣は、「是は京より
 7 女房の八嶋の大臣殿へまいらせられ候」と申。「何事
 8 なるらむ」と問給へは、「よも別の事では候はし。源
 十一才1 氏既淀河尻に出浮て候へは、其をこそつけ
 2 被申候らん。判官、「けにさそ有らん。あの文はへ」
 とて、

3 もたる文うはひとらせ、「しやつからめよ。罪作に
 4 頸なきつそ」とて、山中の木にしはり付てそ
 5 被^レ通ける。判官、扱此文を開て見給へは、誠に
 6 女房の文とおほしくて、「九郎はすゝときおのこ
 7 にて侍へは、かゝる大風・大浪をもきはす、よせ

8 侍ぬと覚侍ふ。相構御勢共ちらさせ給はて、
 十二才1 能く御用心せさせ給へ」とそかゝれたる。判官、「是
 は

2 義経に天のあたへ給ふ文や。鎌倉殿にみせ申
 3 さん」とて、ふかふおさめてそをかれける。明^ル十八日、
 4 讃岐国ひけたと云所を打下て、人馬の息
 5 をそ休ける。其より白鳥・丹生屋打過く八
 6 嶋の城へそ寄給ふ。判官又親家を召て、「是
 7 より八嶋のたちのやうはいかやうなるそ」と問給へ
 8 は、「しろしめさねはこそ候へ、無下にあさまに候。
 塩

十二才1 の干候時は陸と嶋との間は馬のふと腹もつ
 2 かり候はす」と申す。判官、「敵の聞ぬ先に寄よや」
 3 とて、高松の在家に火をかけて八嶋城へよせ
 4 給ふ。去ほとに八嶋には阿波民部重能の嫡
 5 子、田内左衛門教能、伊予河野四郎か召とも
 6 不^レ参を攻とて、其勢三千余騎にて伊予へ
 7 越たりけるか、河野をは打もらしぬ。家子・郎等
 8 に^{・衆人(下ナシ)} 百五十人か頸取て八嶋の大裏へ参らせたり
 十三才1 けるに、「内裏にて賊首の実検不^レ可^レ然」とて

2 大臣殿の御宿所にて頸共実検しける処に、
3 物共、「高松の在家より火出来たり」とてひし
4 めきけり。「ひるて候へは、手あやまちて(下は)○候はし。
敵

5 の寄て火を懸たると覚候。定て大勢でそ
6 候らん。取籠られては叶候まし。とうくめされ
7 候へ」とて、惣門の汀に付、双たる舟共に我先
8 とそ乗給ふ。御所の御舟には女院・北政所・二
十三ウ 1 位殿以下の女房達被_レ召けり。大臣殿父子は
2 ひとつ舟にそ乗給ふ。其外の人々は思_レくに
3 取乗て、或は一町計、或は七八段、五六段など
4 漕出したる処に、源氏の兵共ひた甲七八拾
5 騎、惣門の渚につと出来たる。塩干潟の折節
6 塩干盛成けるに、馬のからすかしら、ふと腹に
7 たつ所も有。其より淺き所も有。けあくる塩
8 のかすみと共にしくらうたる中よりも白旗を
十四オ 1 さとさし上たれば、平家は運尽₊て大勢とこそ
2 見てけれ。判官、敵に小勢とみえしと、五六騎、
3 七八、十騎計、打むれく出来たる。

嗣信最後 三 (屋島軍)

4 判官其日の装束には、赤地錦直垂に
5 紫すその鎧きて、鍬形_ッたる甲の緒を
6 しめ、金作の太刀を帯、廿四さいたるきりふの
7 矢負、滋藤_(マツノ)弓の真_{ツツ}中にき_(真ニ)て、沖の方をにら
8 まへ、大音をあけて「二院の御使、檢非違(下は)○

十四ウ 1 五位尉源義経」とこそ名乗たれ。次に名乗
2 は、伊豆国住人田代冠者信綱、武蔵国住
3 人金子十郎家忠、同与一親範、伊勢三郎義
4 盛とそ名乗たる。つゝゐて名乗は、後藤兵
5 衛実基、子息新兵衛基清、奥州佐藤三
6 郎兵衛次信、同四郎兵衛忠信、江田源三、熊
7 井太郎、武蔵房弁慶など云、一人当千の兵
8 共、こゑくになつて馳来。平家の方には是
十五オ 1 をみて「あれ射とれやく」とて、或は遠矢に射
2 舟もあり。或は指矢に射る舟も有。源氏
3 の兵共是をことゝもせず、弓手になしてはいて
4 通り、馬手になしてはゐてとをる。あけをひ
5 たりける舟共の陰を馬やすめ所にして、
6 おめき叫_ッて攻戦。後藤兵衛実基はふる兵
7 にて有ければ、磯の軍をはせず、先内裏に乱

8 入、手々に火を放て、片時の煙と焼払。大臣
十五ウ1 殿、侍共に、「源氏か勢いかほと有そ」と問給へは、

2 「よも七八十騎には過候はし。」「あな心憂。髪かみの

3 すちを一すちつゝ分て取共、此勢にはたる

4 ましかりつる物を。中に取籠て不討して、

5 あはて、舟に乗、内裏を焼せぬる事こそ

6 安からね。能登殿はおはせぬか。陸に上て一軍

7 し給へかし」と宣は、「承候」とて、越中次郎兵衛

8 盛次を先として、五百余人、小船共に取棄て、

十六オ1 焼払たる惣門の前の汀にをしよせて陣を

2 取。判官八十余騎、矢比によせてひかえたり。

3 越中、二郎兵衛、舟の屋形に立出、大音声

4 をあけて「抑先に名乗給つるとは聞つれ

5 共、海上遙に隔て、其仮名・実名不分明。今

6 日の源氏の大將軍は誰人てましますぞ。

7 名乗り給へや」と云ければ、伊勢三郎あゆませ

8 出て「あなこともをろかや。清和天皇より十

十六ウ1 代の御末、鎌倉殿の御弟、九郎大夫判官殿

2 そかし。盛次、「さる事有。一とせ平治の合戦に

3 打負、父討れて後、みなし子にて有しか、鞍

4 馬の児し、後には金商人の所従になり、粮

5 料背負て奥州のかたへ落まとひし、其

6 小冠者か事か」とそ云ける。義盛、「舌のやはら

7 かなるまゝに君の御事な申そ。さいふわ人共

8 こそ、砥浪山の合戦に打負、北陸道にさま

十七オ1 よひ、からき命生つゝ、乞食して上たりし人

2 か」とそ云ける。盛次重て、「君の御恩にあきみち

3 て、何の不足さに乞食をはすへき。さいふわ

4 人共こそ伊勢、国鈴鹿山にて山たちし、我身

5 も過、所従をも過とは聞しか」と云ければ、金子

6 十郎家忠進出、「無詮殿原の雑言哉。我も

7 人も、空事云付て雑言せんには、誰かはを

8 とるへき。こそ春、摂津、国一谷にて武蔵・

十七ウ1 相模の若殿原の手なみのほとをはみてん物

2 を」と云処、弟の与一親範そはに有けるか、いわ

3 せもはてす、十二束二ふせ、よひるてひやうと

4 放。越中次郎兵衛か鎧の胸板にうらく

5 程にそ立たりける。扱こそ互の詞戦はやみに

6 けれ。能登殿「船軍は様有物そ」とて、鎧直

7 垂をは着給はす、唐巻染、小袖に唐綾威

8 鎧きて、いか物作太刀を帶、廿四さいたるたかう
十八才1 すへうの矢負、滋藤^{シト}弓を持給へり。王城^{イチ}一のつ

2 よ弓・精兵にておはしければ、矢さきにまはる
3 物、射とをされすと云事なし。いかにもして源

4 氏の大將軍、源九郎義経を只一矢に射落

5 さんとねらはれけれ共、源氏の方にもさきに

6 心得て、奥州佐藤三郎兵衛嗣信・同四郎兵

7 衛忠信・江田源三・熊井太郎・武蔵房弁慶

8 など云、一人当千の兵共、馬頭を一面に立^テ双

十八ウ1 大將軍の矢面に馳ふさかりければ、力及給

2 はす。能登殿、「そのき候へ、矢面の難人原」と

3 て、さしつめ引つめ散ぐに射給へは、矢庭に

4 鎧武者十騎計射落さる。中にも、真前^{マツ}に

5 進^シたる奥州佐藤三郎兵衛嗣信か、弓手

6 の肩より馬手の脇へつと射ぬかれ、しはしも

7 たまらず、馬よりさかさまに百と落^ト。能登殿

8 の童に、菊王丸と云大力の剛者、萌黄威

十九才1 腹巻に、三枚甲の緒をしめ、打物の鞘をはつし、

2 三良兵衛か頸をとらんと走かゝる。弟の四良

3 兵衛忠信そはに有けるか、兄の頸をとらせ

4 しと、よつひゐてひやうと放^ツ。菊王丸かく

5 さすりののはつれを、あなたへつと射ぬかれて

6 犬るに倒ぬ。能登殿是を見給て、左の手に

7 弓を持たなから、右の手にて菊王丸を捉て

8 舟へからりとなけられたり。敵に頸はとら

十九ウ1 れね共、痛手なれば死にけり。此童と申は、

2 越前三位通盛卿の童也。然を三位うたれ

3 て後、能登守にそつかはれける。生年十八歳

4 とそ聞えし。能登殿此童を討せて、余に

5 哀に思はれければ、其後は軍もし給はす。

6 判官は奥州佐藤三良兵衛を陣の後

7 に昇入させ、急馬より下、手を取て、「いかゝ覚

8 る」。三郎兵衛、息下にて申けるは、「今はかうに

二十才1 覚候」。思置事はなきか」と宣は、「別に何事をか

2 思置候へき。さは候へ共、君の御世にわたらせ給

3 はんを見まいらせすして死に候こそ、心にかゝり

4 候へ。さ候はては、弓矢取の敵の矢に当て死

5 なん事、元より期する処て候。就^レ中『源平

6 の御合戦に、奥州佐藤兵衛次信と云けん

7 者、主の命に代^ツて讃岐国八嶋の磯にて

8 被討にき』と、末代の物語に申されん事、弓
二十ウ1 矢取身には、今生の面目、冥途の思出なる

2 へし』とて、只よりはりにそよりはりける。判官も鎧(マニ)

3 のそてを顔に押当て、さめくゝとそ泣れける。

4 良あて「此程(高ニ)に貴僧や有」とて、一人尋被(マ)出

5 たり。「只今死ぬる手負に一日経書て吊給

6 へ』とて、黒馬+のふとうにたくましきに、よひ鞍

7 をきて、彼僧にそたひにける。此馬は判官

8 五位尉になられし時、是をも五位になして大夫

二十一オ1 黒とよはれし馬也。一の谷の後、ひえとりこえ

2 をも此馬にてそおとされける。弟の四郎兵衛

3 をはしめて、是をみる侍共みな涙を流て、

4 「此君の御為に命をうしなはんこと、全

5 露塵程も不レ惜」とそ申しける。

那須与一 四

6 さるほとに、阿波・讃岐に平家を背て、源

7 氏を待ける兵共、あそこのみね、此洞より十四

8 五騎、廿騎計馳来ほとに、判官程なく

二十一ウ1 三百余騎に成給ぬ。「今日は日暮ぬ。勝負を

2 決すへからず」とて引退処に、沖より尋常シに

3 かさたる小船を一艘、汀へ向てそ漕セける。渚

4 より七・八段計に成しかは、舟をよこさまに

5 なす。「あれはいかに」とみる処、船の中より年

6 の齡十八九計なる女房の、柳の五ツきぬに紅

7 の袴きたるか、みなくれなるの扇の日出したる

8 を舟のせかいに夾立て、陸へ向てそ招キける。

二十二オ1 判官、後藤兵衛実基を召て、「あれはいかに」

2 と宣は、「射よとにこそ候めれ。但大將軍矢

3 面に進て傾城を御覽せられん所を、手

4 たれにねらふて射落との謀と覚候。さは候へ

5 とも、扇をは射させらるへうや候らん」と申ければ、

6 判官、御方に射つへき仁は誰か有。「上手共多

7 候中に、下野国住人、那須太郎資高か子、

8 与一宗高こそ、小兵て候へ共、手きゝて候へ。「證

二十二ウ1 拠はいかに」と宣は、「かけ鳥ニなどを争アラカウて三に

2 二は必射落候」と申。「さらはよへ」とてめされけり。

3 与一、其比は未ツ廿はかりの男也。かちに赤地、

4 錦をもて壬ヲウキ・祛ハクシテいろへたる直垂に、萌黄匂

5 の鎧きて、足白の太刀を帯、廿四さいたるきり

6 ふの矢負、うすきりふに鷹の羽わり合て

7 はいたりける、ぬための鎧をそ差添^へたる。滋藤^{シトウ}、
8 弓脇にはさみ、甲をはぬいて、たかひもにかけ、
二十三才 1 判官の御前に畏^ル。「いかに宗高、あの扇の真中^{マナ}

2 射て、敵に見物せさせよかし」。「仕^{ツカマツ}共存候はす。

3 是を射損し候程ならば、なかき御方の弓矢

4 の御きすにて候へし。一定仕らんする仁に可^ヘ

5 被^レ仰付や候らん」と申ければ、判官大に怒て、

6 「鎌倉を立て、西国へ向はん人々は義経か命

7 を背へからす。少も子細を存せん人々はこれ

8 よりとうく鎌倉へ可^レ被^レ帰」とこそ宣けれ。

二十三才 1 与一、重て辞せはあしかりなにとやおもひけん、

2 「御説て候へは、つれんをはしり候はす。仕てこそ

3 見候はめ」とて、御前罷立^ツ。黒馬^{キバ}のふとうたく

4 ましきに、まろはやすたる金覆輪の鞍を

5 をきてそ乗^ツたりける。弓取なをし、手綱搔^{カイ}

6 くて、汀へ向てそ歩^セける。御方の兵共、与一か後

7 を遙に見送て、「一定此若者^{ワカ}、仕と覚候」と

8 申ければ、判官もよに頼しけにそ見給ける。

二十四才 1 矢比少遠^シかりければ、海の中一段計打入

2 たりけれ共、扇の交猶七段計は有らむとこそ

3 見えたりけれ。比は二月十八日酉刻計の事なる

4 に、折節北風はけしくて、いそうつ浪も高かりけり。

5 舟は蕩上蕩坐漾は、扇も串にさたまらず

6 閃^{ヒラメ}たり。奥には平家、舟を一面に双て見物す。

7 陸には源氏、轡^{ウハミ}を並て是をみる。何れもく

8 晴ならずと云ことなし。与一目を瞑て、「南無八

二十四才 1 幡大菩薩、別而は我国神明、日光権現、宇

2 都宮、那須湯泉大明神、願はあの扇の真^マ

3 中射させてたはせ給へ。是を射損する程

4 からは、弓切折自害して、人に二度面を向へ

5 からす。今一度本国へ向へんと思食は、此矢

6 はつさせ給ふな」と心のうちに折念して、目を

7 見開たれば、風もすこし吹よはて、扇もいよ

8 けにそ成たりける。与一、鎧を取てつかひ、よひ

二十五才 1 いてひやうと繹^ツ。小兵といふちやう、十二束三

2 ふせ、弓はつよし、鎧は浦響程に長鳴して、

3 不^{アヤマ}誤^{タス}。扇の金目際一寸計をひて、ひふつとそ

4 射切たる。鎧は海へ入ければ、あふきはそらへそ

5 あかりける。春風に一按^{（下二按）}二按^{（下二按）}もまれて海へ

6 さとそ散たりける。皆紅の扇の日出したるか、

7 ゆふ日の耀に、しらなみのうへに漾、浮ぬ沈ぬ
8 被_レ蕩ければ、奥には平家、舷を叩て感たり。

二十五ウ 1 陸には源氏、えひらを叩てとよめきけり。

弓流 五

2 ○感に不堪とおほしくて、平家の方より、年
3 の齡五十計なる男の、黒革威鎧きたりける
4 か、白柄の長刀もて、扇たてたる所に立て舞
5 しめたり。伊勢_{三郎}義盛、与一の後にあゆま
6 せよて、「御説て有そ、仕」と云ければ、今度はなか
7 さしとてつかひ、よひゐてまた、中をひやう
8 つはと射て、船底へ倒に射倒す。「あ、射たり」

二十六オ 1 と云者もあり。「いや、無情」と云者も有けり。

2 今度は平家の方には音もせず。源氏の方
3 には又鞆を叩てとよめきけり。平家は
4 を無_レ本意とや思けん、弓持て一人、楯つる
5 て一人、長刀もて一人、武者三人渚にあかり、
6 「爰をよせよ」とそ招たる。判官、「馬つよ
7 からん若党共、馳寄てけちらせ」と宣へは、
8 武蔵_国住人、みをのやの四郎、同藤七、同十郎
二十六ウ 1 上野_国住人、丹生_{四良}、信濃_国住人木曾

2 中次、五騎つれておめひてかく。楯のかけより、
3 ぬりのに黒ほろはいたる大の矢をもて、先ま
4 先に進_レたるみをの屋の十郎か馬の左のむな
5 かいつくしを筈のかくる、程にそ射こうたる。

6 屏風を返様に馬はとうと倒れは、主は弓

7 手の足をこえ、馬手の方へ下立_レて、頓太刀を

8 そ抜_レたりける。楯のかけより、太_{下太}長刀もたる男

二十七オ 1 一人打振て懸ければ、みをのやの十郎、小太刀、

2 大長刀に叶はしとや思けん、かいふて逃けれ

3 は、頓つゝゐて追懸たり。長刀にてなかんす

4 るかとみる処に、さはなくして長刀をは弓手

5 の脇にかいはさみ、馬手の手をさしのへてみ

6 をのやの十郎か甲のしころをつかまふとす。つか

7 まれしと逃。三度つかみはついて、四度のたひ

8 に、むすと捉。しはしそたまてみえし、鉢付のいた

二十七ウ 1 よりふつとひきてそ逃たりける。みをのや

2 の十郎は御方の馬の陰へ逃入て、いきつき

3 るたり。残り四騎は馬をおしうてかけす、見物

4 してそゐたりける。敵は追てもこす、白柄長刀

5 杖につき、かふとのしころを高く差上、大音声

6 をあけて、「遠からん者は音にも聞、近からん人は目にもみ給へ。是こそ京童ワランヘのよふなる上総、

8 悪七兵衛景清よ」と名乗捨てそ帰ける。平

二十八才1 家は是に心ちをなおし、「悪七兵衛うたすな、

2 つゝけや。景清うたすなつゝけ」とて、二百余人

3 渚にあかり、楯をめん鳥羽につき双、「こゝを寄

4 よや」とそ招たる。判官、「安からぬ事也」とて、伊

5 勢、三郎義盛、奥州佐藤四郎兵衛忠信

6 を先に立、後藤兵衛父子・金子兄弟を弓手・

7 馬手に立、田代冠者を後に立、判官八十余騎

8 おめひて先をかけ給へは、平家の方には馬に

二十八ウ1 乗たる武者は少、大略歩武者カキなりければ、

2 馬に不レ被レ当とさと引退、皆舟にそ乗にける。

3 楯は算を散したるやうに散ゝにかけなされぬ。

4 源氏の兵共勝にて馬のふと腹つかる程に

5 打入ハツく攻戦。舟の内より熊手をもて、判官

6 の甲のしころにからりく二三度打かけられ

7 は、御方の兵共太刀・長刀の先にて打はらひく

8 責戦。判官いかゝはせられ劔、弓を被懸落ぬ。

二十九才1 うつむき、鞭をもて、搔よせて、とらうくとし

2 給へは、みかたの兵共、「たゝ捨させ給へ」と云

3 け 給へは、みかたの兵共、「たゝ捨させ給へ」と云

4 給へは、みかたの兵共、「たゝ捨させ給へ」と云

5 給へは、みかたの兵共、「たゝ捨させ給へ」と云

6 給へは、みかたの兵共、「たゝ捨させ給へ」と云

7 給へは、みかたの兵共、「たゝ捨させ給へ」と云

8 給へは、みかたの兵共、「たゝ捨させ給へ」と云

二十九ウ1 てとらすへし。尪弱たる弓を敵の取もて、『是

2 こそ源氏の大将軍、源九郎義経か弓よ』

3 なんと嘲弄せられん事か口惜ければ、命かへ

4 て取そかし」と宣は、皆又（高）是を感じけり。一日

5 戦暮し、夜に入ければ、平家の船は沖に浮。

6 源氏はむれ・高松の中なる野山に陣をそ

7 取たりける。源氏の兵共此三日か間是不レ臥け

8 り。一昨日渡辺・福嶋を出て、大浪に被レ蕩

三十才1 てまゐります。昨日阿波国勝浦につゐて、

2 軍して、終夜中山越、今日又一日戦暮し

3 たりければ、みなつかれはてゝ、或は甲を枕にし、

4 或は鎧袖、鞆などを枕にして、前後とも不知そ

三十

- 5 臥たりける。され共其中に判官と伊勢三郎
- 6 はねさりけり。判官は高所⁺にのほりあかり、
- 7 敵やよすると遠見^トして居給へは、伊勢三
- 8 郎はくほき所に隠^レゐて、敵よせは先馬の
- ウ1 ふと腹いんとて待かけたり。其夜平家の
- 2 方には、能登殿を大將軍にて、源氏を夜討
- 3 にせんとしたくせられたりしか共、越中次郎兵
- 4 衛と海老次郎と先陣をあらそふほとに、其
- 5 夜も空う明にけり。よせたりせは、源氏なにか
- 6 あらまし。よせさりけるこそ、攻⁺の運の極なれ。

志度合戦 六

- 7 ○明ければ、平家は当国志度浦へ漕退。判
- 8 官八十余騎志度へ追てそ被^レ懸ける。平家
- 三十一オ1 是をみて、「源氏は小勢ぞ。中に取籠て討
- 2 や」とて、千余人渚にあかり、源氏を中に取籠
- 3 て、我討捕^レらんとそ進ける。去ほとに、八嶋に
- 4 残留たる二百余騎の勢共、をくれ馳に
- 5 馳来る。平家はをみて、「あはや、源氏の大勢
- 6 のつゝいたるぞ。被取籠ては叶まし」とて引
- 7 退⁺、皆舟にそ乗にける。四国をは九郎判

三十一

三十二

- 8 官攻落されぬ。九国へは入られす。只中有の
- 三十一ウ1 衆生とそみえし。しほにひかれ、風にまかせて、
- 2 いつちをさす共なく被^レ蕩行こそ悲しけれ。
- 3 判官、志度うらにおりゐて、頸共の実検
- 4 しておはしけるか、伊勢三郎義盛を召て、
- 5 「阿波民部重能か嫡子田内左衛門教能、伊与
- 6 の河野四郎かめせ共不^レ参を攻とて、其勢
- 7 三千余騎で伊与へ越たりけるか、河野を
- 8 は討もらしぬ。家子・郎等百五十人か頸とて、
- 三十二オ1 昨日八嶋の内裏へまいらせたりけるか、今日
- 2 是へ付と聞。汝行向て、こしらへてみよ」と
- 3 宣は、畏承て、旗一流給はてさすまゝに、其
- 4 勢十六騎、皆白装束に出立て馳向。さる
- 5 程に義盛、教盛に行逢たり。あはひ一町計
- 6 を隔て、赤旗・白旗うたてたり。義盛使者
- 7 をもて云けるは、「且聞召ても候らん。鎌倉殿の
- 8 御弟九郎大夫判官殿と申人、平家追討
- 三十二ウ1 の為に、西国へ御下候。其御内に伊勢三郎義
- 2 盛と申者にて候か、大将に可⁺申事あて、是迄
- 3 罷向て候。軍合戦のれうに候はねは、物具

4 をもし候はす。弓矢をも帶し候はす。只あけて
 5 入させ給へ」といひければ、三千余騎の兵共
 6 皆中を開てそとをしける。義盛、教能に打
 7 双て云けるは、「且聞召ても候らん。鎌倉殿の御
 8 弟九郎大夫判官殿、院宣を承て平家追
 三十三才 1 討の為に西国へ御下候。其御内に、伊勢三郎
 2 義盛と申者にて候か、一昨日阿波国勝浦に
 3 付て、御辺伯父桜間介殿討奉り候ぬ。昨日
 4 八嶋の内裏へをし寄て、御所大裏焼払、
 5 主上は海へ入せ給ぬ。大臣殿父子生捕奉り。
 6 能登殿は御自害、其外の人々は、或は御自害、
 7 或は海へいらせ給て候。余党の少く残つるをは
 8 今朝志度浦にて皆討捕候ぬ。御辺の父阿
 三十三才 1 波民部殿は、降人にまいらせ給て候を、義盛か
 2 預奉て候か、『あなむさんや、田内左衛門か是をは
 3 夢にもしらすして、明日は軍して討れまい
 4 らせんすらんむさんさよ』と終夜嘆給ふかいた
 5 はしさに、それをしらせ奉らんか為に罷向て候。
 6 此上は、甲をぬき、弓の弦を弛て降人に参、
 7 父を今一度みまいらせんとも、又、軍してうた

8 れまいらせん共、兎も角も御辺のはからひそ」と
 三十四才 1 云ければ、田内左衛門、「且聞こと(高に)も少もたかはす」
 2 とて、甲を脱、弓の弦を弛て降人に参。大
 3 将かかように成上は、三千余騎の兵共、皆如
 4 此。纔に十六騎にくせられて、おめくと降人
 5 にこそ成にけれ。義盛、判官の御前に畏て此
 6 由申ければ、「義盛か策神妙也」とこそ感せら
 7 れける。頼田内左衛門は、物具被召て、伊勢の
 8 三郎にあつけらる。「扱、あの兵共はいかに」と宣は、
 三十四才 1 「遠国の者共は、誰を誰とか思まいらせ候へき。
 2 只世の乱をしつめて国をしろしめさんを君と
 3 せん」と申。判官、「尤さるへし」とて三千余騎の
 4 者共、みなわか勢にそくせられける。去程に渡
 5 辺・福嶋両所に残留たりける二百余艘の
 6 船共、梶原を先として二月廿一日の辰刻計、
 7 八嶋の磯にそ付にける。「西国をは九郎判官
 8 攻落されぬ。今は何の用に逢へき。六日の暮
 三十五才 1 浦、会に不逢花、いさかいはてのちきりきかな」
 2 とそ笑はれける。判官、都を立給て後、住吉の
 3 神主長盛、都へ上り院参して、「去十六日の丑、

4 刻計、当社第三の神殿より鎬矢の声

5 出て、西を指て罷候ぬ」と申ければ、法皇大

6 に御感あて、御剣以下種々の神宝を長盛

7 して、住吉大明神へまいらせらる。昔神功皇

8 后、新羅を責させ給し時、伊勢大神宮

三十五ウ 1 より二神荒御前を差副させ給けり。二神

2 御船のともへに立て、新羅を安攻したかへさせ

3 給けり。帰朝のち、一神を摂津国住吉の

4 郡にとまらせおはします。住吉大明神の

5 御事也。今一神は信濃国諏訪郡に跡を

6 垂。諏訪大明神、是也。昔の征伐の事を

7 思召忘給はすして、今も朝の怨敵を亡し

8 給へきにやと、君も臣もたのましくそ被思召ける。

鶏合 壇浦合戦 七

三十六オ 1 ○去程に判官は周防の地○をし渡^{（高）}て、兄の三

2 河守と一になる。平家は長門国ひく嶋にそ

3 付にける。源氏は阿^{（米・渡）}わの国勝浦に付て、

4 八嶋の軍に打勝ぬ。平家はひく嶋に付と、

5 聞えしかは、源氏は同国⁺をいつにつくこそふし

6 議なれ。又、紀伊国住人熊野別当湛増は、

7 平家重恩の身成しか、忽心かはりして、平

8 家へや参へき、源氏へや参へきと思けるか、

三十六ウ 1 田辺今熊野に七日参籠申、御神楽を

2 奏し、権現へ祈誓を致す。「但白旗に付」と

3 御託宣有しか共、猶うたかひをなしまいらせ

4 て、赤鶏^{（赤）}七、白鶏^{（白）}七、是をもて権現の御前

5 にて勝負をせさせけるに、赤鳥一も不勝、

6 皆負てそ逃にける。扱こそ源氏へ参らん

7 とは思定けり。一門の者共相催、都合其勢

8 二千人、二百余艘の兵船に乗つて、

三十七オ 1 若王子の御正体を舟に乗奉り、旗のよこ

2 かみには、金剛童子を書奉て、壇のうらへ

3 よするをみて、源氏も平家も共に拝し

4 たてまつる。され共源氏に付けは、平家

5 興醒てそ思はれける。又、伊与国住人、河野

6 四郎通信、百五十艘の大船に乗つてこ

7 き来り、是も源氏に付けは、平家いと、

8 けう醒てそ思はれける。源氏の勢は重れは、

三十七ウ 1 平家の勢は落そ行。源氏の舟は三千余

2 艘、平家の舟は千余艘、唐船少く相交れ

3 り。去程に元暦二年三月廿四日の卯刻に、
4 豊前国田浦・門司関、長門国赤間関、壇浦
5 にて、源平の矢合とぞ定ける。其日、判官と
6 梶原とし軍既せんとす。梶原申けるは、
7 「今日の先陣をは 景時にたひ候へかし」。判官、
8 「義経なくてはこそ」。梶原、「まさなふ候。殿は大
三十八才1 將軍にて、ましく候物を」。判官、「それ思ひも
2 よらず。鎌倉殿こそ大將軍よ。義経は奉行を
3 承たる身なれば、たゞわ殿原と同じ事そ」と
4 宣は、梶原先陣を所望しかねて、「天性此
5 殿は侍の主には難成」とそつふやきける。判
6 官、「日本」のおこの者哉」とて、太刀のつかに手
7 をかけ給ふ。梶原も、「鎌倉殿より外は、主は
8 持給ぬ物を」とて、是も太刀のつかに手をそ

三十八才1 かけゝる。父か気色をみて、嫡子の源太景
2 季・次男平次景高・同三郎景家、父子主
3 従十四五人、打物のさやをはつて、父と一所
4 によりあふたり。判官の気色を見奉て、伊
5 勢三郎義盛・奥州佐藤四郎兵衛忠信・江
6 田源三・熊井太郎・武蔵房弁慶なと云、一人

7 当千の兵共、梶原を中に取籠て、我うとら
8 むとぞ進ける。され共判官には 三浦介取
三十九才1 つき奉り、梶原には土肥次郎つかみつて、
2 両人手をすて申けるは、「是程の御大事を前に
3 かゝへなから、とし軍候なは、平家勢付候なんす。
4 且は鎌倉殿のかへり聞召れん所も穩便なら
5 す」と申ければ、判官しつまり給ぬ。梶原進に
6 不及。其よりしてそ、梶原、判官をにくみ初奉て、
7 讒言して終に失ひけるとぞ聞えし。去程に、
8 源平両方陣を合す。陣のあはひ、海の面纔
三十九才1 に三十余町をそ隔ける。門司 赤間 壇浦は漲
2 て落塩なれば、源氏の舟は心ならず塩に向て
3 をしおとさる。平家の舟は塩にをふてそ出来たる。
4 沖はしほのはやければ、汀に付て、梶原敵の舟
5 の行ちかふを熊手にかけて引寄、親子・主従
6 十四五人、打物のさやをはつし、敵の舟に乘移り
7 くともへに散くにないてまはり、ふんとり余多
8 して、其日の高名の一の筆にそ付にける。去程に、
四十才1 源平両方、陣を合て時をつくる。上は梵天迄
2 も聞え、下は堅牢地神も驚給らんとぞみえ

四十

- 3 し。新中納言知盛卿、舟の屋形に立出て、大音
- 4 声を揚て、「天竺・震旦にも、日本我朝にも
- 5 無^レ双名將・勇士といへ共、運命^レ尽ぬれは不^レ及
- 6 力。されとも名こそ惜けれ。いつの為に命をは
- 7 おしむへき。少も退く心有へからず。是のみそ思
- 8 ふこと」と宣は、飛驒三郎左衛門景經御前近候
- ウ1 けるか、「是承れ、侍共」とそ下知しける。上総の
- 2 悪七兵衛進出て、「坂東武者は、馬の上にて
- 3 こそ口は聞共、船戦はいつ調練し候へき。縦は、
- 4 魚の木に上たるてこそ候はんすらめ。一くに取
- 5 て海につけなん物を」とそ申ける。越中次郎兵
- 6 衛、「同は、大將源九郎とくん給へ。九郎は勢小男^{チイサキコ}の
- 7 色白かんなるか、当門^{ムカハ}齒の少さしあらはれて、誠に
- 8 しるかななるそ。但、直垂と鎧を常にきかふなれ
- 四十一オ1 は、きと見分かたかん也」とそ申ける。悪七兵衛、
- 2 「其小冠者、心こそ猛^{マウ}とも、何程の事か有へき。
- 3 片脇にはさんて、海に入なん物を」とそ申たる。新
- 4 中納言はか様に下知し給て後、大臣殿の御前
- 5 におはして、「今日は御方の兵共よくみえ候。但阿
- 波、

四十一

- 6 民部重能こそ心かはりしたると覺候。きやつ
- 7 か頭^{カウ}をはね候はや」と被^レ申ければ、大臣殿、「さし
- も
- 8 奉公の者て有物を。させる見いたしたる事も
- ウ1 なうて、いかんか左右なふ頸をはねらるへき。重
- 2 能召^メ」と宣は、阿波民部重能、木蘭地直垂
- 3 にあらひかはの鎧きて、御前に畏^レて候。「いかに、重
- 4 能、今日はわるふみゆる。四国の者共に、軍よふせ
- 5 よと下知せよかし。いかに、臆^レしたるな」と宣は、
- 「なし
- 6 かは臆^レし候へき」とて、御前を罷立。新中納言、太刀
- 7 のつかくたけよとにきて、「あはれ、重能めか頸を打
- 8 おとさはや」と思食て、大臣殿の御方を頻^リ見ま
- 四十二オ1 いらせ給へは、御ゆるされなければ、力及給はず。
- 2 去程に、平家は千余艘を三手につくる。先山
- 3 賀兵藤次秀遠、五百余艘て先陣に漕向^フ。
- 4 松浦党、三百余艘て二陣につく。平家の
- 5 君達、二百余艘て三陣につく給ひけり。山
- 6 賀兵藤次秀遠は、九国一番のつよ弓勢兵
- 7 にて有ければ、我程こそなけれ共、普通^{サマ}様の

8 勢兵五百人すくて、舟のともへに立、肩を一面に双て、五百の矢を一度に釈。源氏は三

42二ウ 1 千余艘の舟成ければ、勢の数さこそは多

2 かりそめ共、あそこ爰に射ければ、いつくに勢兵

3 有共みえさりけり。大將軍九郎大夫判官真

4 先に進て戦けるか、楯も鎧もたまらずして、

5 散々に射しまさる。平家、御方勝ぬとて頻

6 に攻鼓をうて、悦の鬨をそつくりける。

遠矢 八

8 ○源氏の方には、和田小太郎義盛、舟には不乗、

43三オ 1 馬に打乗て汀にひかえたりけるか、馬のふと

2 腹つかるほとに打入鎧のはな踏そらし、平家

3 の勢の中をさしつめ引つめ散々に射ければ、

4 三町か内外の者をば、はつさすつよふ射けり。其

5 中に殊、遠射たるとおほしき矢をば、「其矢給

6 らん」とそ招ける。新中納言知盛卿此矢をぬ

7 かせてみ給へは、しらのに鶴の本白、この羽わ

8 り合てはいたる矢の、十三束三ふせ有けるに、

43三ウ 1 にくつまきより一束計をひて、「和田小太郎

2 平義盛」と漆にてそ書付たる。平家の方には

3 精兵おほしといへ共、さすか遠矢いる者やなかり

4 けん、良あて、伊与国住人仁井紀四郎親清、

5 此矢を給はて射返す。是も三町余をつと射

6 渡て、和田か後一段計にひかえたる三浦石左

7 近太郎か弓手のかいなにしたゝかにこそ立た

8 りけれ。三浦の人共よりあふて、「あなにくや、和

44四オ 1 田小太郎か我に過たる勢兵なしと心得て恥か

2 いたるおかしさよ」と笑ければ義盛、「安からぬ

3 事成」とて、小舟に乗て漕出させ、平家の勢

4 の中をさしつめ引つめ散々に射ければ、多

5 の者共手負、射殺さる。奥の方より又判官の

6 乗給へる舟にしらのゝ大矢を一射立て、和田

7 かやうに、「其矢給らん」と招けり。判官、後藤兵衛

8 実基を召て、此矢をぬかせて見給へは、しらのに

44四ウ 1 山鳥の尾をもてはいたる矢の十四束三ふせ

2 有けるに、「伊与国住人仁井紀四郎親清」と○書

3 付たる。判官、「御方に此○射つへき仁は誰かある」

と

4 宣は、上手共いくらも候中に、「甲斐源氏に阿

5 佐里与一殿こそ勢兵の手きゝてましく候へ」。

6 「さらはよへ」とて、よはれたり。浅利与一出来。

「奥よ

7 り此矢を射て候か、返給らんと招候。御辺あそは

8 され候なんや」と宣は、「給はてみ候はん」とて取て

四十五オ1 つまよて、「是はのか少よはふ候。矢つかも少みしか

ふ

2 候。同は義成か具足て仕候はん」とて、ぬりのに

3 黒ほろはいたる矢の、我か大手にをしにきて、十

4 五束有ける、ぬりこめ藤の弓の九尺計有ける

5 にとてつかひ、よひいてしはしかため、是は四町余を

6 つと射渡て、大船のへにたゝる仁井紀四郎親

7 清か真たゝ中をひやうつはと射て、船底まさ

8 かさまに射たをす。元より、此浅利与一は精兵の

四十五ウ1 手きゝ也。二町か内に走鹿をははつさすつよふ

2 射けるとそ聞えし。其後は、源平の兵共互に

3 不命惜攻戦。され共、平家の御方には十善

4 帝王、三種神器を帯して渡らせ給へは、源

5 氏いかゝあらんすらんとあやうゝ思処に、しはしは

6 白雲かとおほしくして、虚空にたゝよひけるか、

7 雲にてはなかりけり。主もなき白旗一流まい

8 さかて、源氏の船のへに棹つけのをのさはる

四十六オ1 程にそみえたりける。判官、「是は八幡大菩薩の

2 現し給へるにこそ」と悦て、甲をぬき、手水嗽を

3 して、是を拝し給ふ。兵共みな如此。又、(高いるか) 鯨と

云

4 魚一二千はふて、平家の舟の方へそ向ける。大

5 臣殿、小博士晴信を召て、(高いるか) 鯨は常に多けれ共、

6 未か様の事なし。急度かんかへ申」と宣は、「この

7 (高いるか) 鯨はみかへり候なは、源氏亡ひ候ぬへし。直には

ふ

8 てとをり候なは、御方の御軍あや(高いるか) う候」と申も

四十六ウ1 はてねは、平家の舟の下を直にはふてそ通り

2 ける。「世の中は、今はかう」とそ申たる。阿波民部

3 重能は、此三ヶ年か間、平家に付て忠を致

4 したりしか共、子息田内左衛門尉教能を生捕に

5 せられて、今はいかにも叶はしとや思剣、忽に心

6 替して、源氏と一に成りにけり。新中納言知盛

7 卿、「あはれ、重能を切てすつへかりける物を」と後

8 悔せられけれ共、甲斐そなき。平家の謀に、

四十七オ1 よき人をは兵船にのせ、雑人原をは唐船に

2 乗せて、源氏心にくさに唐船を攻は、中に取籠
 3 てうたんとしたくせられたりしか共、重能か返り
 4 忠の上は唐船には目もかけず、大將軍のや
 5 つし乗給へる兵船をそ攻たりける。去程に
 6 四国・鎮西の兵共、皆平家を背て源氏に
 7 付。今迄随付たりし者共も、君に向て弓を
 8 引、主に対して太刀をぬく。彼岸につかんと
 四十七ウ 1 すれば、波高して難叶。此汀によらんとす
 2 れは、敵矢さをそろへて待かけたり。源氏の
 3 国あらそひ、今日を限とそみえたりける。

先帝身投 九

4 ○去程に源氏の兵共、平家の舟に乘移りけ
 5 れは、水主・楫取共、或は射殺され、或切殺され、
 6 舟をなをすに不及、舟底に皆倒臥にけり。
 7 新中納言知盛卿、世中は今はかうと思はれ
 8 けん、小舟に乗、急御所の御船に参、「世中は今
 四十八オ 1 はかうと覚候。みくるしき物共みな海へ入させ
 2 給へ」とて、ともへに走廻、はいたりのこふたり、塵
 3 ひろい手つから掃除せられけり。女房達、「中
 4 納言殿、さて軍はいかにやいかに」と問給へは、「め

つ
 5 らしきあつま男をこそ御覽せられ候はんすら
 6 め」とて、からくと被笑ければ、女房達、「何条
 の

7 只今の戯ぞや」とて、こゑくにおめき叫給
 8 ひけり。二位殿は日比より思儲給へる事なれば、
 四十八ウ 1 鈍色の二衣打かつき、練袴のそは高くは

2 さみ、神璽を脇にはさみ、宝剣を腰に差、
 3 主上をいたき奉て、「我身は女成とも、敵の手に
 4 はかゝるまし。君の御供申也。君に御志思まいらせ
 5 給はん人々は、いそきつゝき給へ」とて、舷へしつ
 6 くとあゆみ被出けり。主上今年は八歳にそ
 7 ならせましとける。御年の程より遙かに年預
 8 させ給ひて、御姿厳く、あたりもてり耀計也。
 四十九オ 1 御髪黒ゆうくとして、御背過させ給へり。あき
 2 れたる御有様にて、「抑、尼せ、我をはいつちへ
 3 具して行かんとするそ」と仰ければ、二位殿稚
 4 君に向まいらせて、涙をさへて、「君は未しろ
 5 しめされ侍はすや。先世十善戒行御力に
 6 よて、今万乗主とは生され給たれ共、悪縁に

7 ひかれて、御運既尽させ給侍ぬ。先東に向はせ
8 給て、伊勢大神宮に御暇申させおはしまし、
四十九ウ1 其後西に向はせ給て、西方浄土の来迎

2 にあつからんと誓はせおはしませ。御念仏侍へし。
3 此国は粟散辺地とて、心憂堺にて侍へは、極
4 楽浄土にて目出度所へ具しまいらせ侍そ」と
5 かきくとき申されければ、山鳩色の御衣に
6 ひんつら結はせ給ひて、御涙におほれ、ちいさふ
7 うつくしき御手を合、先東に向はせ給て、伊
8 勢大神宮に御暇申させ給ひ、其後西に向

五十 オ1 はせ給ひて御念仏有しかは、二位殿頓抱き奉て、
2 「浪の下にも都の侍そ」と慰め奉り、千色チイロの底
3 にそ沈み給ふ。悲哉、無常の春の風、忽に花
4 の御姿を散し、無情哉、分段のあらき浪、玉
5 体を沈め奉る。殿をは名長生ナガシて、長きすみか
6 と定、門をは号不老フシて、老せぬとさしと書たれ
7 共、未十歳の内にして底のみくつとならせ給
8 ふ。十善帝位の御果報、申も中々をろか也。
五十 ウ1 雲上竜降て海底の魚と成給ふ。大梵
2 高台閣の上、釈提喜見の宮の内、古は槐

3 門棘路の間に九族をなひかし、今は舟の内、
4 波の下にて、御命を一時に亡し給こそ悲しけれ。

能登殿最後 十

5 ○女院は、比有様をみまいらさせ給て、今はかう
6 とや思食れけん、御硯、御焼石、左右の御ふとこ
7 ろに入、海へいらせ給たりしを、渡辺源五馬允
8 むつる小舟をつと漕よせ、御髪を熊手に懸
五十一 オ1 て引上奉る。女房達、「それは女院にて渡らせ

2 給そ。あやまち仕な」と宣へは、判官に申て急
3 御所の御舟へ渡し奉る。大納言の佐の局は内
4 侍所の御からうとを脇にはさみ海へ入らんとし
5 給たりしか、袴のすそを舷に被射付、蹴纏倒
6 給けるを、武士共取留奉る。扱、内侍所の御から
7 うとの鎖を握きて御ふたを既欲開。忽目くれ
8 衄たる。平大納言時忠卿、被生捕ておはしけるか、
五十一 ウ1 「それは内侍所にて渡らせ給ふそ。凡夫は見
2 奉らぬ事そ」と宣は、兵共皆逃去ぬ。其後、判
3 官、平大納言に宣合て、如元ふかふからけ納
4 奉る。平中納言教盛、修理大夫経盛、鎧の上
5 に負碇、兄弟手に手を取くみ、海にそ沈給ひ

6 ける。小松新三位中将資盛、同少将有盛、従父
7 兄弟左馬頭行盛、是も三人手に手を取くん
8 て、同海にそ沈給ける。人々はか様にし給へとも、

五十二オ 1 大臣殿親子はさもし給はず、舷に立出て、四方

2 見廻しておはしけるを、平家の侍共余の心憂

3 さに、そはをつと走とをる様にて、先大臣殿を

4 海へかはとつき入奉る。是をみて右衛門督頓

5 つゝゐて飛入給ぬ。人々は重鎧の上に重物を

6 負たり、抱たりして入はこそ沈め、此人親子は

7 さもし給はず。右衛門督は、「父沈給は、我もしつ

8 まん。助かり給は、共に助からむと思、互に目を

五十二ウ 1 見かはして、なましるに水練の上手にておはし

2 ければ、あなたこなたへ泳ありき給ひけるを、伊

3 勢三郎義盛小船をつと漕よせて、先右衛門

4 督を熊手にかけて引上奉る。是をみて大臣

5 殿、いと沈もやり給さりけるを、一所に取奉て

6 けり。乳母子飛驒三郎左衛門景経是を見

7 て、「我君取奉るは何者ぞ」とて、義盛か舟に

8 をし双乗うつり、太刀をぬいてうてかゝる。義盛

五十三オ 1 か童、主をうたせしと中に隔たり、三郎左衛門

2 にうてかゝる。三郎左衛門かうつ太刀に、童、甲のま

3 かう打は、られ、二の刀に頸打おとさる。義盛あふ

4 なうみえける処に、となりの舟より堀弥太郎

5 親経よひゐてひやうと釈。三郎左衛門打甲

6 を射させひるむ処に、義盛か舟に押双、乗

7 うつり、三郎左衛門にくんて臥。堀か郎等、主に

8 続て乗うつり、三郎左衛門か鎧の草摺引

五十三ウ 1 あけ、つかもこふしもとをれくと三刀差

2 て頸を取。大臣殿は生捕にせられておはしける

3 か、乳母子か目の前にて、かくなるをみ給につけ

4 ても、いか計の事をか思はれけん。凡能登守

5 教経の矢さきにまはる物こそなかりけれ。

6 今日を最期と思はれけん、赤地錦直垂

7 に唐綾威鎧きて、鍬形たる甲のを、

8 しめ、いか物作の太刀を帯、廿四差たる切ふ

五十四オ 1 の矢負、滋藤弓を持ち給へり。さしつめ引

2 つめ散くに射給へは、多の者共手負、射殺

3 さる。矢種皆尽ければ、大太刀・大長刀左右に

4 持て散くにないてまはり給に、多の者共手

5 負、討れにけり。新中納言、能登殿のもとへ

6 使者を立て、「いたふ罪な作給ひそ。さりとては
7 よき敵かは」と宣は、扱は大将の源九郎にくめ
8 こさんなれと心得て、打物くきみしかにとて
五十四ウ 1 敵の舟に乗うつりく、ともへに散るにない

2 てまはり給ふ。され共、判官を見しり給はねは、
3 物具のよき武者をは判官かと目をかけて

4 馳廻給ふ。いかゝはしたりけん、判官の乗給へる
5 舟に乗あて、あはやと目を懸て飛てかゝる。

6 判官叶はしと思はれけん、長刀をは弓手の

7 脇にかいはさみ、御方の舟の二丈計のいたり

8 けるに、ゆらりと飛乗給ぬ。能登殿ははや

五十五オ 1 わさやをとられたりけん、頓続ても飛給はす。

2 能登殿、今はかうとや被思けん、大太刀・大長刀

3 海へなけ入、甲を脱て捨られけり。鎧の袖・

4 草摺かなくり落、とう計着て、大童に成、

5 大手をひろけて、被立たり。大方撥当そみえ

6 し。おそろしなともをろか也。大音声を揚て、「我

7 と思はん者共は、よて教経くんで生捕にせよ。

8 鎌倉へ下て、頼朝に逢て、物一詞いはんと思

五十五ウ 1 也。よれやよれ」と宣共、よる者一人もなかり

2 けり。爰に土佐国住人、安芸の郷を知行

3 しける安芸大領実康か子に、安芸の太郎

4 実光とて、卅人か力あらはしたる大力の剛者、

5 主にちともをとらぬ郎等一人、弟の二郎も

6 普通には勝たりけるか、安芸太郎、能登殿

7 を見奉て、「心こそ猛ましますとも、何程の事か

8 有へき。縦長十丈の鬼成共、我等三人つかみ

五十六オ 1 ついたらんするに、なとかしたかへさるへき。いさや

く

2 み奉らん」とて、能登殿の舟に押双、乗うつり、

3 太刀のきさを調て、一面に打懸。能登殿、

4 先まさきに進たる安芸太郎か郎等を、す

5 そを合て海へとうとけ入給ふ。其後つゝゐた

6 りける安芸太郎をは弓手の脇にかいはさ

7 み、弟次郎をは馬手の脇に取てはさみ、一し

8 めしめて、「いさうれ、己等、さらは四手山の供せ

五十六ウ 1 よ」とて、生年廿六にて海へつとそ入給ふ。

内侍所都入 十一

2 新中納言知盛卿、「みるへきほとこの事をはみつ。

3 今は何とか期すへき」とて、乳母子の伊賀平

4 内左衛門家長を召て、「日比の契約をはたかへ

5 ましきか」と宣は、「さる事候」とて、中納言殿

6 にも鎧二領きせ奉り、我身も鎧二領きて、

7 手に手を取くみ、海にそ沈給ける。是を見

8 奉て、二十余人の侍共、続て海にそ沈ける。

五十七才 1 され共、其中に越中次郎兵衛・上総五郎兵衛

2 忠光・悪七表衛景清・飛騨四郎兵衛は、何とし

3 てか遁たりけん、そこをも終に落にけり。海上

4 には赤旗・赤しるし、切捨、かなくり捨たりけ

5 れは、立田河の紅葉を嵐の吹散したるか

6 如し。汀によする白浪も薄紅にそ成にける。

7 主もなき空舟は、塩にひかれ風にまかせて

8 うちを指ともなくゆられ行こそ悲けれ。

五十七才 1 生捕には前内大臣盛公・平大納言時忠・

2 藏頭信基・讃岐中将時実・右衛門督清宗・兵

3 部少輔雅明・大臣殿八歳若君、僧には二位

4 僧都（感入）合全真・法勝寺執行能円・中納言

5 律師仲快・経誦房阿闍梨融円、侍には源

6 大夫判官季貞・摂津判官盛澄・橘内左衛門

7 尉季康、藤内左衛門尉信康・阿波民部父子、以

8 上卅八人とぞ聞えし。菊地次良高直・原田大夫

五十八才 1 種直は軍以前より年来の郎等共、催集て、

2 甲をぬき、弓の弦を弛て降人に参る。女房

3 達には、女院・北政所・廊御方・大納言佐局・帥

4 佐殿・治部卿局已下、以上四十三人とぞ聞えし。

5 元暦二年の春の暮、いかなる年月にて、一

6 人沈海底、百官浮波上。国母・官女は東夷西

7 戎の手に随ひ、臣下卿相は数万の軍旅に

8 被擒て旧里に帰給ひしに、或は朱買臣か錦

五十八才 1 を着さる事を嘆、或は王昭君か胡国に赴

2 し恨もかくやとぞ悲給ける。去程に四月三日

3 九郎大夫判官義経、源八広綱をもて、院御所

4 へ奏聞せられけるは、「去三月廿四日卯刻に豊

5 前国田浦・門司関、長門国赤間関・壇浦にて

6 平家を攻亡し、内侍所しるしの御箱ことゆへ

7 なふ都へかへり入せ給ふ」由、奏聞せられたり

8 ければ、法皇大に御感有けり。公卿・殿上人もい

五十九才 1 さみ悦合れけり。広綱を御坪内へ召て合

2 戦の次第を委う御尋あり。其勸賞には当

3 座に一臈を経すして左兵衛尉にそなされ

ける。同五日、北面に候藤判官信盛を御前へ
 5 召て、「内侍所、一定帰り入せ給ふか、みてまいれ」
 6 とて、西国へ遣す。頓院御馬を給て宿所へ
 7 も不_レ帰、鞭をうて西をさして馳下。去程に九
 8 郎大夫判官義経、平氏男女生捕とも相具
 五十九ウ 1 して上げるか、同十四日播磨国明石浦にそ
 2 付にける。名をえたる浦なれば、深行まゝに
 3 月さへのほり、秋の空にも不_レ劣。女房達はさし
 4 つとひて、「二年是をとをりしにはさすかかゝる
 5 へしとは思はさりし物を」とて忍びねに泣そ
 6 合れける。帥佐殿はいと思残せる事もおはせ
 7 さりけるか、涙に床も浮はかりし也。つくく月
 8 をなかめ給ひて、

六十

1 なかむれはぬる、袂にやとりけり
 2 月よ雲井の物かたりせよ
 3 雲の上にみしにかはらぬ月影の
 4 すむにつけても物そかなしき
 5 大納言の佐のつほね、
 7 わか身こそ明石のうらに旅ねせめ
 おなし浪にもやとる月哉

8 判官も武士なれ共、「さこそ昔恋しう物悲
 六十ウ 1 しう思給ふらめ」と、身にしみて哀にそ思はれ
 2 ける。同廿五日、内侍所・しるしの御箱、鳥羽に
 3 つかせ給ふと聞えしかは、御迎にまいらせ給ふ
 4 人々、勘解由小路中納言経房、卿・檢非_(下)○使別
 5 当左衛門督実家・高倉宰相・中将泰通・
 6 権右中弁兼忠・榎並・中将公時・但馬少将
 7 教能、武士には伊豆藏人大夫頼兼・石河判
 8 官代能兼・左衛門督有綱とぞ聞えし。其
 六十一オ 1 夜子刻に、内侍所・しるしの御箱、太政官庁へ
 2 いらせおはします。宝剣は失にけり。神璽は
 3 海上に浮たりけるを、片岡太郎経春が取上
 4 奉たりけるとかや。

一門大路 ○渡 十二

5 ○二宮帰り入せ給ふと聞えしかは、法皇より御
 6 迎の御車をまいらせらる。外戚の平家に
 7 とらはれさせ給て、西海の浪上にたゞよはせ
 8 給ふ御事を御母儀も、御乳母持明院の宰相
 六十一ウ 1 も、不_レ斜御嘆有つるに、今又待請まいらせ
 2 給て、いか計らうたく被思召けん。同廿六日、平

3 氏の生捕共、鳥羽に着て、頓其日都へ入て大路を渡さる。皆小八葉の車に、前後の簾を

4 あけ、左右の物見を開く。大臣殿は浄衣を着

5 給へり。日比は色白きよけにおはせしか共、しほ

6 風に瘦黒みて、其人共みえ給はす。されとも

7 いとも思入たる気色もおはせず、四方見めぐら

六十二オ1 してそおはしける。右衛門督は、白直垂にて父の

2 御車の尻にまいられたりけるか、涙にむせひ

3 うつぶして、目も見あげ給はす。平大納言時

4 忠卿の車も、同やりつゝけたり。讃岐中将

5 時実も、同車にて被渡へかりしか、現所労とて

6 不被渡。蔵頭信基は、疵を蒙たりしかは、閑道

7 より入にけり。凡都の内にもかきらす、是をみん

8 とて、山々寺々より、老たるも若も来り集り、

六十二ウ1 鳥羽の南の門、造道、四塚まではたとつゝい

2 て、みる人幾千万と云数をしらす。人は顧事

3 を得ず、車は輪をめくらす事不能。去治承・

4 養和の飢饉、東国・西国の軍に、人種多亡ひ

5 失たりといへ共、猶残は多かりけりとぞみえし。

6 都を出て中一年、無下にま近き程なれば、

7 目出かりし事も忘れず。さしも恐をのゝき
8 し人の今日の有様、夢うつゝ共分かねたり。

六十三オ1 心なきあやしのしつのを、しつのめに至るまで

2 涙を流し、袖をぬらさぬはなかりけり。まして

3 馴近付ける人々の心中、被推量て哀なり。

4 年来、重恩を蒙て、父祖の時より祇候

5 せし輩の、さすか身の捨てたさに、多は源氏

6 についたりしか共、昔のよしみ忽に忘るへきに

7 もあらねは、さこそは悲しう思ひけめ。されは

8 袖を顔に押当て、目をあげぬ者も多かりけり。

六十三ウ1 大臣殿の牛飼は、木曾か院参の時、車やり

2 損して被切たりける次郎丸か弟の三郎丸にて

3 そ有ける。鳥羽にて判官に申けるは、「舎人・牛

4 飼など申者は、いやしき下藹の終にて、心有

5 へきては候はね共、年来使はれまいらせ候

6 し御志、不浅候。何かくるしう候へき。御ゆるされ

7 を蒙て、大臣殿の最後の御車を仕候はや」と

8 申ければ、判官情有人にて、「尤さるへし、とう

六十四オ1 く」とてゆるされけり。三郎丸不斜悦、尋常

2 に装束、懷より遣繩取出て付かへ、なみたに

3 くれて行先^{きさき}にみえねば、牛の行に任つゝ、泣く
4 遣てそ罷ける。法皇も、六条東洞院に御車
5 を立て御覽せらる。公卿・殿上人の車共も、
6 同う立双^{たへ}たり。さしも御身近召仕はれしかは、
7 昨日、今日の様に思召て、御涙せきあへさせ
8 給はず。「日比はいかなる人も、あの人の目をも懸

六十四ウ 1 られ、詞の末にも預らんとこそ思しに、今日か

2 やうに見なすへしとは、誰か思ひし」とて上下

3 涙を流されけり。一年^{ひと}内大臣に成て、悦申

4 有しには、公卿には花山院中納言を始奉て

5 十二人扈從して遣つゝけらる。藏人頭親

6 宗以下の殿上人、十六人前驅す。中納言四人、

7 三位中將も三人までおはしき。頓此時忠卿も、

8 其時は未左衛門督にておはしけるか、御前へ被

六十五オ 1 食まいらせて、様々の引出物を給て出給し

2 けいきは、花やか成し事共そかし。今日は月

3 卿雲客一人もなし。同う檀浦にて生なから

4 とらはれし廿余人の侍共、皆白直垂^{しろなほ}にて

5 鞍の前輪にしめつけてそ被渡ける。六条

6 を東へ川原まで被渡て、帰て判官の宿

7 所、六条堀川なる所にすゑ奉て、きひしう

8 奉守護。御物まいらせたりけれ共、胸せき

六十五ウ 1 ふさかて、御箸をたにも、立られす。夜になれ

2 共、装束をたにもくつろけ給はず。袖かた

3 しいて臥給たりけるか、御子右衛門督に袖を打きせ

4 給けるを、守護し奉る熊井太郎見奉て、「哀

5 高も賤も恩愛の道程悲かりける事はなし。

6 御子息右衛門督に御袖を打きせ給たらは幾

7 ほとこの事のおはすへきそ」とて、みなよろひの

8 袖をそぬらしける。

鏡 十三

六十六オ 1 ○去程に、四月廿八日、鎌倉前兵衛佐頼朝從

2 二位し給ふ。越階とて、二階をこゆるこそ難^{がた}有

3 朝恩なるに、是は既三階也。三位をこそし給ふ

4 へかりしか、平家のし給たりしをいまうて也。其

5 夜の子刻に、内侍所・しるしの御箱、太政官の

6 庁より温明殿へ入せおはします。主上行幸な

7 て、三ヶ夜臨時の御神樂有けり。右近將

8 監小家能方、別勅を承て弓立・宮人と云

六十六ウ 1 神樂の秘曲仕て、勸賞蒙けるこそ目出

2 けれ。此歌、祖父八条判官資忠と云し伶

3 人の外は、知れる者なし。余に秘して、我子の

4 親方には不教して、堀河院御在位の時、伝

5 参らせて死去したりしを、君、親方に教させ

6 おはします。家をうしなはしと思食れける御志、

7 感涙押へかたし。抑、此内侍所と申御鏡は、昔

8 天照太神、天岩戸に閉籠らんとせさせ給

六十七オ 1 し時、いかにもして我御かたちをうつしをき、御子

2 孫にみせ奉らんとて、御鏡を鑄給へり。是

3 猶御心に不叶とて、又鑄替させおはします。

4 先の御鏡は、紀伊国日前・国懸社は也。後の

5 御鏡をは、御子天忍穗耳尊に授まいらさせ

6 給て、「殿を同うして住給へ」とそ被仰ける。扱、

7 天照太神、天岩戸に閉籠らせ給て、天下

8 暗と成たりしかは、八百万代の神達、神集に

六十七ウ 1 あつまり、岩戸の口にて御神樂を奏し

2 給しかは、天照太神、感に絶させ給はすして岩

3 戸を細目に開て御覽せられけるに、互に顔

4 の白みえけるよりして、面白と云詞ははしまりける

5 とそ聞えし。其時、こや祢手力雄と云、大力の

6 神よて、「ゑい」と云て、開給て後は、たてられす

7 と云り。第九代の御門、開化天皇の御時までは、

8 一殿にあかめられたりしを、第十代の御門、崇神天

六十八オ 1 皇御門御宇六年に及て、靈威に恐まいらさ

2 せ給て、天照太神を大和国いそかきのひろ

3 きに遷まいらせ給し時、此御鏡をも別の

4 殿へうつし奉て、此比は、温明殿にそましくける。

5 遷都・遷幸後、百六十年を経て、村上天皇

6 御宇天徳四年九月廿三日の夜の子刻に、

7 大内中重に始て焼亡ありき。左衛門の陣

8 より出たれば、内侍所のおはします温明殿も

六十八ウ 1 程近し、如法夜半の事なれば、内侍も女官

2 も参不令、賢所を出し奉るにも、不能。小野

3 宮殿、急被参給て、「内侍所既焼させ給ひぬ。

4 世ははやかうにこそ」とて、御涙にむせはせ給ふ

5 処に、内侍所は自炎の中を飛出させ給て、

6 南殿の桜のやうにかゝらせ給て、光明赫奕

7 として、朝の日の山のはを出るに不異。小野宮

8 殿、「世は失さりけり」と頼しう思食。右の膝

を

六十九才 1 つき、左の袖を広げて、泣く申させ給ひけるは、

2 「昔、天照太神百王をまほらんと御誓有けん、

3 其御誓未あらたまらすは、神鏡実頼か袖に

4 やとらせ給へ」と申させ給ける、御詞の未をはら

5 さる先に、神鏡飛うつらせおはします。則御袖

6 に裹て、太政官朝所へ渡し奉り給ふ。此世に

7 は、請取奉らんと思寄人も、誰か有へき。神

8 鏡も又、やとらせ給へからず。上代こそ猶も目

六十九才 1 出たけれ。

文沙太 十四

○平大納言時忠卿は、判官

2 の宿所近おはしけるか、子息讃岐中将時実

3 を招て、散すましき文を一合、判官に被取

4 てあるそとよ。是を鎌倉の源二位にみせなは

5 人々も亡損し、我身も命助らるまし。い

6 か、せん」と宣は、讃岐中将被申けるは、「判官は、

7 武なれ共、女房などの打絶申事をはもてはな

8 れすところ承候へ。姫君余多ましく候へは、何

七十一才 1 にも、御一所みせさせおはしませ。したしうなら

2 せ給て後、被仰て御覽せらるへうや候らん」と

3 被申ければ、大納言涙をはらくと流て、「日比

4 は我娘共をは女御・后にとこそ思しか。行くの

5 人にみせんとは思はさりし物を」とてなけれは、

6 讃岐中将、「今はさやうに思食へからず」とて、中

7 将のはからひに、「たうふくの姫君の生年十七に

8 成給ふを」と被申けれ共、大納言それをは猶

七十才 1 いたはしき事におほして、先の腹の姫君の

2 生年廿一に成給ふをそ、判官にはみせられけ

3 る。是は年こそ少おとなしうおはしけれ共、

4 みめ姿うつくしく、心様優におはしけれは、

5 判官よに難有事にぞ宣ける。先の上、

6 河越太郎重春か娘も有けれ共、それをは

7 別の所へうつし奉て、座敷しつらうてを

七十一才 1 かれたり。扱、件の文の事を宣被遣たりけれは、

2 判官剩封をたにとかすして、大納言の許へ

3 遣す。頓焚そ捨られける。いかなる文共にてか

4 有けん、おほつかなふそ聞えし。西国も治り、道

5 の間も煩なく、都もおたしかりけれは、「九郎判

6 官に過たる程の人そなき。日本国は、只九郎判

7 源二位もれ聞て、「こはいかに。頼朝可_レ然様に
8 はからひて、討手をつかはしたれはこそ、平家は
七十一ウ1 たやすう亡たれ。九郎計て争か天下をは
2 可_レ謚。人こそ多けれ、平大納言の智に成_レ
3 て、大納言も （下へ）ち あつかふらんもうけられす。
4 大納言、又婿取不_レ可_レ然。人のかく云にをこて、
5 いっしか世を我まゝにしたるにこそあんなれ。
6 是へ下_ッても定て過分の振舞をせんすら
7 む」とそ宣ける。

副将 十五

8 ○去程に、元暦二年五月七日、九郎大夫判官
七十二オ1 義経、大臣 （下へ）○父子具足し奉_ッて、明日関東下
2 向の由聞えしかは、大臣殿、判官の許へ使者を
3 立て、「明日関東下向の由聞え候。就其候ては、
4 生捕の内に八歳の童と被_レ付まいらせて候
5 けるは、未浮世に候やらん。給て、今一度み候はや」
6 と宣被_レ遣たりければ、判官の返事に、「誠に
7 さこそは被_レ思食候らめ、高も賤も恩愛の道
8 は思切れぬ事にて候也」とて、川越小太郎重
七十二ウ1 房か預り奉_ッたりける若君、大臣殿の御許へ

2 入奉_レるへき由宣へは、人に車借_ッて乗奉_レる。女
3 房二人付奉_ッたりけるも、一車（ヒトツ）に乗_ッてそ出に
4 ける。若君は父を遥にみまいらせ給はて、不_レ
5 斜うれしけにおほしたるこそ、いとうしけれ。
6 大臣殿、「いかに副将、是へ」と宣は、頓父の御膝の
7 上へそ被_レ参ける。大臣殿、若君の髪かきなて、
8 涙をはらくと流_レて、守護の武士共に宣ひ
七十三オ1 けるは、「是は、各聞給へ、母もなき者にて有そ
2 とよ。此子か母は、是を生とて、産をは平_{（タイ）}にし
3 たりしか共、頓打臥てなやみしか、『此後又いか
4 ならん人の腹に公達をまうけ給と云とも、
5 是をは思食かへすして、指はな_ッて乳母などの
6 許へもつかはさて、わらはか形見にも御覽せよ』
7 など云し事か不便さに、朝敵を平けん時、あ
8 の右衛門督をは大將軍せさせ、是○は副將軍
七十三ウ1 せさせんすれはとて、名を副将と付たりしかは、
2 不_レ斜うれしけにて、今を限の時迄も、名をよ
3 ひなとして愛せしか、七日と云にはかなく成_ッて
4 あるそとよ。此子をみるたひことには、其事か忘
5 かく覚るそや」とて被_レ泣ければ、守護の武士

6 共も、鎧袖をそぬらしける。右衛門督も泣給
7 は、乳母も袖をそしほりける。大臣殿、「いかに副
8 将、うれしうもみつ。とう候へれ」と宣共、若君不
帰

七十四オ 1 給。右衛門督是をみて、余に哀に被^レ思ければ、

2 「いかに副将御前、今宵はとう帰れ。只今客人
3 のこうするそ。朝は急参^{アシタ}」と宣へ共、父の御淨
4 衣の袖にひしと取つて、「いなや、帰らし」と
5 こそ被^レ泣けれ。かくて遙に程へれば、日もやう
6 く暮にけり。扱^アしもあるへき事ならねは、
7 乳母の女房いたきとて終に車に乗^セ奉り、
8 二人の女房共も袖を顔にをし当て、泣く
七十四ウ 1 暇申つゝ、供に乗^ツてそ出にける。大臣殿は、
2 若君の後を遙に御覽し送^ツて、「日来の恋し
3 さは、事の数ならず」とそ悲しみ給ふ。此子は母の
4 遺言^{ユイゴン}かむさんなれはとて、乳母などの許へも
5 つかはさて、朝夕、御前にてそたて給ふ。三歳にて
6 うる冠きせて、義宗とそ名乗せける。様○く
7 おいたち給ふまゝに、みめかたち巖^{イハ}しう、心様
8 優におはしければ、大臣殿も悲しく、いとうしき

七十五オ 1 事におほして、されは西海の旅の空、舟の中

2 の住るまでも引くして、片時^{カタ}もはなれ給はず。
3 然^{シカ}を軍破^{イク}て後は、今日そ互に見給ける。重

4 房、判官に、「若君をは、何と御はからひ候やらん」
5 と申ければ、「鎌倉まで具し奉るに及はず。

6 汝是にてあひはからへ」と宣は、重房宿所に帰^ッ

7 て、二人の女房共に申けるは、「大臣殿は明日鎌倉
8 へ御下候。重房も御供に罷下候間、緒方三郎

七十五ウ 1 惟義か手へ渡まいらせ候へし。とうくめされ

2 候へ」とて、御車を寄たりければ、若君は、「又昨日

3 の様に、父御前の御許へか」とて、不^レ斜うれし

4 けにおほしたるこそいとうしけれ。二人の女房

5 共も、一車に乗^ツてそ出にける。六条を東へや

6 つてゆく。「あはれ、是はあやしき物哉」と、肝魂

7 をけて思処に、良あて、兵五六十騎かほと、

8 さゝめいて川原中へ打出^{ウツテ}。頓車を遺留^{リウ}、敷皮

七十六オ 1 しゐて若君すゑ奉る。若君よにも心細け

2 におほして、「我をは何ちへ具して行かんとするそ」

3 と仰ければ、二人女房共、兎角^{ウサカ}の御返事にも

4 不及、こゑをはかりにそおめきさけひ給ける。

5 重房か郎等、太刀を引そはめ、左の方より若
6 君の御後に立まはり、既切奉らむとしければ、
7 若君み付給て、いくほと可通事のやうに、
8 急乳母の懷の内へそ逃入給ける。心つよふ引
七十六ウ 1 出し奉るにも及はねは、若君をかへ奉て、天に
2 仰地に臥て泣悲め共甲斐そなき。良

3 あて、重房涙を押して申けるは、「今はいかに思
4 食共、叶はせ給ひ候まし。とうく」と申ければ、
5 其時、乳母の懷の中より引出し奉り、腰の
6 刀にて押伏て、終に頸をそかいてける。頸をは
7 判官に見せんとて、取て行。二人女房共かち
8 はたしにて追付、「何かくるしう侍へき。御頸をは
七十七オ 1 給て、後の御教養をしまいらせ侍はん」と申け
2 れは、判官有情人にて、「尤さるへし。とうく」と
て、

3 たひにけり。不斜悦、是を取て懷に入、京
4 の方へ帰るとそみえし。其後五六日して、桂
5 河に女房二人身を投たる事有けり。一人少
6 人の頸を懷に入て沈たりしは、此若君の乳
7 母の女房にてそ有ける。今一人むくろを抱

8 て沈たりしは、損^(米・カインヤク) 釈の女房也。乳母か思切は
七十七ウ 1 攻ていかせん、損釈の女房さへ身をなけ
2 るこそ難有けれ。

腰越 十六

3 ○去程に元暦二年五月七日、九郎大夫判官
4 義経、大臣殿父子具し奉て、既都を立給ぬ。
5 栗田口にも成ぬれば、大内山も雲井のよ
6 そに隔たりぬ。関の清水を見給て、大臣殿
7 泣くかうそ詠し給ひける。

8 みやこをはけふを限りのせき水に
七十八オ 1 又あふ坂のかけやうつさん

2 道すからも心細けにおはしければ、判官有
3 情人にて、様々に慰め奉り給ふ。大臣殿、「相
4 構今度の命を助てたへ」とそ宣ける。判官、「遠
5 国、遥嶋へそうつしまいらせ候はんすらん。御命
6 失ひまいらするまでは、よも候はし。縦さ候とも、
7 義経か今度の勲功の賞に申替て、御命計
8 をは助まいらせ候はん。御心安うおほしめされ候へ」
と

七十八ウ 1 被申ければ、大臣殿、「縦夷^(高・五) か千嶋成共、無甲斐

2 命たにあらは」と宣けるこそ、口惜けれ。日数経
3 は、同五月廿三日、判官鎌倉へこそ付給へ。梶原
4 平三景時、判官より先立て鎌倉殿に申

5 けるは、「日本国は今無所残したかひ奉て候か、
6 但御弟九郎大夫判官殿こそ終の御敵とは

7 みえさせ給て候へ。其故は、一を以万を察とて、

8 『二谷を上レの山より不レ落は、東西の木戸口破レかた

七十九オ 1 し。されは生捕をも死捕をも義経にこそみ

2 すべきに、物の用にも相給はぬ蒲殿の方へ見

3 参に可レ入給ヤある。本三位中将殿を是へたは

4 しと候は、参て給らむ』とて既軍出来とし候

5 を、景時か土肥に心を合て、本三位中将殿を

6 土肥二郎に預奉て後こそ、代はしまりて候し

7 か」と申ければ、鎌倉殿打領て、九郎か今日はへ

8 入なる。各用意し給へ」と宣は、大名・小名馳集て

七十九ウ 1 無程数千騎計に成にけり。鎌倉殿は随

2 兵七重八重にすゑをき、我身は其中におはし

3 なから、「九郎は此置の下よりもはい出んする

4 者也。され共頼朝はせらるまし」とそ宣ける。金

5 洗沢、関するて、大臣殿父子奉請取て、判

6 官をは腰越へ被追回。判官、「こはされは何事そ

7 や。去年の春、木曾義仲を追討せしより以来、

8 度々平家を平、今年の春亡しはて、内侍所・

八十オ 1 しるしの御箱事ゆへなふ都へ返入奉り、剰大

2 將軍父子生捕て、是迄下たらんするに、縦

3 いかなる僻事有共、一度はなとか対面なかるへ

4 き。凡は九国の惣追捕使にも被補、山陰・山

5 陽・南海道、何にても被預、一方の御かためにも

6 なされんするかこそ思ふたれば、纔に伊与

7 国計可知行由宣て、鎌倉中へたに不レ被

8 入して、追上らる事、こはされはなに事そや。

八十ウ 1 日本国をしつむる事、義経・義仲のしはさ

2 にあらずや。たとへは、同父か子て、先に生るを

兄トシ、後ニ生ルヲ

3 弟とする事也。誰か天下をしらん、しらするへ

4 き。剰見参をたにとけすして被追上事、不

5 知所謝」とつふやかれ共、無甲斐。判

官様々に

6 陳し給へ共、鎌倉殿、景時か讒言の上は終に

7 用給はす。判官泣く一通の状を書いて、広基

8 のもとへつかはす。其状に云、源義経乍恐申上候
八十一オ1 意趣者、御代官之其一撰、為勅宣御使傾朝
2 敵、雪会稽恥辱。可行勲賞処、思外依虎
3 口之讒言、默莫太勲功。義経、無犯蒙科。
4 有功雖無謬、蒙御勘気間、空沈紅涙。不
正

5 讒者実否、不鎌倉中問、不能述素意
6 徒送数日。当此時、永不奉拜恩顔、骨肉同
7 胞義已絶、宿運極似空歟。将又先世業因
8 感歎。悲哉、此条、故亡父尊靈不裁断、誰人
八十一ウ1 申披愚意悲歎。何人垂哀憐哉。事新申状、
2 雖似述懷、義経身体髮膚受父母、不經幾
3 時節、故守殿御他界間、作孤、抱母懷中、自
4 赴大和国宇多郡以来、未住一日片時安堵、
5 思。無甲斐命雖存、京都經廻難治間、蔵
6 身在く所、辺土遠國為棲、土民百姓等被
7 服仕。然交契忽純熟、為平家一族追討令
8 上洛手合、誅戮木曾義仲之後、為傾攻平
八十二オ1 氏、或時峨巖石鞭駿馬、為敵不顧亡命、
2 或時漫大海、凌風波難、不痛沈身海底

3 懸骸於鯨鯢腮。不然、甲冑為枕、弓箭為
4 業本意、併奉休亡魂憤、欲遂年来宿望
5 外無他事。剩義経補任五位尉条、当家重
6 職、何事若之。雖然、今憂深嘆切也。自不
神

八十二ウ1 御助外、争達愁訴。依是以諸神諸社牛王
8 宝印背、全不挾野心旨、奉請驚日本國中
大小神祇冥道、数通雖書進起請文、猶以
2 無御有免。其我国神国也。神不享非礼。所
3 憑非他、偏仰貴殿広大慈悲、窺便宜、令達
4 高聞、回秘計、被有無誤旨、預放免、積善
5 余慶及家門、栄花永伝子孫。仍開年来
6 愁眉、得一期安。書紙不尽、併令省略
7 候畢。義経恐惶謹言。元暦二年六月五日
8 源義経、進上因幡守殿江、とそ被書たる。
八十三オ 大臣殿被斬 十七
1 去程に、鎌倉殿、大臣殿に對面あり。御座ける
2 所、庭を一隔て向なる屋にすゑ奉り、簾の
3 中より見出して比氣藤四郎義員をもて
4 被申けるは、「平家を別て頼朝か私の敵と奉

5 思事は努^ク候はす。只帝王の仰こそ重候へ」
6 と被^レ申ける。「其故は、池の禪尼の如何に嘆^キ宣と
7 云共、故入道大相国の御赦^{ユルサレ}候はては、頼朝争助
8 かり候へき。され共、朝敵と成給て後、急可^ニ追
八十三ウ 1 討^ニ由の賜院宣^ヲ間、さのみ王地にはらまれて、
2 詔命を可^レ背にもあらねは、是までむかへ奉^ツ
3 たり。去なから、御見参に罷入候こそ本意に
4 候へ」と被^レ申たりければ、義員、是を申さんとして、
5 大臣殿の御前へ参りたりければ、居なをり、畏^{リッ}給
6 そ口惜き。東国の大名・小名なみゐたりける
7 中に、京の者いくらもあり。又、平家の家人た
8 りし者も有^リ。皆つまはしきをして、「あな心憂
八十四オ 1 や。居なをり、跪^リ給たらは、御命の助かり給ふへき
2 か。西国にていかにも成給ふへき人の、乍^{トラハ}生被^レ擒
3 て、是迄下給ふも理哉」と云ければ、「けにも」と云
4 人もあり、又、涙を流す人もあり。其中に或人
5 の申けるは、「猛虎^{マウコ}在^ニ深山^ニ則^ハ、百獸^{ハクシユ}震怖^{イゾツ}。在^ニ
6 檻^{カン}穽^ニ中^ニ則^ハ揺^{ハシ}尾索^ヲ食^ツとて、猛虎^{マウコ}の在^ニ深^ニ
7 山^ニ時は、百獸^{モウ}恐^{ゾク}怖^{ゾル}といへ共、取て被^レ籠檻^{リョウカン}中^ニぬ
る

8 後は、掉^{フツテ}尾向^ヲ人^ニらん様に、心猛^イ大將軍も運
八十四ウ 1 尽て後は、心かはる事なれば、大臣殿も、角^{ツノ}御
2 坐^{ハスル}にこそ」と申人も有けるとかや。判官様^ツ
3 に陳^チし給へ共、鎌倉殿、景時か讒言の上は、
4 終に用給はす。大臣殿父子具し奉^ツて急可^ニ
5 上給^ニ由宣^ヲ間、六月九日^ノ請取^リ奉^ツて、又都へ帰
6 上給ふ。大臣殿は今日も日数の延事^ルをうれ
7 しき事にそおはしたる。道すからも此^{ココ}にて
8 やく^ニと被^レ思けれ共、国^ニ宿^ニ打過^ク通ぬ。
八十五オ 1 尾張^{ウヅマ}国内海と云所あり。故左馬頭義朝の
2 被^レ討し所なれば、一定此にてそ切れんすらんと
3 思はれけれ共、其をも過しかは、「扱^ハは命の助から
4 んするやらん」と被^レ思けるこそはかなけれ。右
5 衛門督は、「なしかは命をたすくへき。かやうにあつ
6 き比なれば、頸の損せぬやうにはからひて、
7 都近ふ成てそ切れんすらむ」と被^レ思けれ共、
8 大臣殿の余に心細けにおはしたるかいたはし
八十五ウ 1 さに申されす。只念仏をのみそ進被^レ申け
2 る。同廿一日、近江^ノ国篠原^ノ宿に付給ふ。昨
3 日までは父子^ニ一所におはしけるを、今朝より引

4 離て、別の処にすゑ奉る。判官有情人
5 にて、三日路より人を先立、善知識の為に
6 とて、大原本性房湛豪と申聖を被請下
7 たり。大臣殿、善知識に向て宣ひけるは、「扱も
8 右衛門督は、何に ○ やらん。縦頭は被刎とも、
むくろは

八十六オ 1 一席に臥とこそ契しに、此世にてはや別ぬる
2 事の悲さよ。此十七年か間、一日片時も身を
3 不離、西国にていかにもなるへかりし身の、乍生
4 被捕て、京・鎌倉恥をさらすも、あの右衛門督
5 ゆへ也」とて被泣ければ、善知識の聖も哀に
6 被思けれ共、我さへ心弱ては不叶とや被思剣、
7 涙をし拭、さらぬ体にもてないて、「誠にさこそは
8 思食れ候らん。受生させ給てより以来、一天、
八十六ウ 1 君の御外戚にて丞相位に至らせ給候ぬ。昔
2 もためし少。今又かゝる御目に合給も、只先
3 世の宿業也。世をも人をも、神をも仏をも、
4 不可恨思召。大梵王宮深禅定樂、思へはほと
5 なし。況電光朝露の下界の命にをひてを
6 や。切利天の億千歳、只如夢。卅九年をすく

7 させ給ひけんも、纔に一時の間也。誰か嘗たりし
8 不老不死藥、誰か保たりし東父西母命。秦始皇
八十七オ 1 皇極奢しも、遂には驪山の墓に埋れ、漢
2 武帝の惜命給ひしも、同杜陵の苔に朽に
3 き。『生ある者は必滅、釈尊未免梅檀煙給。』
4 樂尽て悲来る。天人猶逢五衰日』とこそ承
5 はれ。されは仏は『我心自空、罪福無主、歡心無心、
6 法不住法』とて、善も惡も空也と觀するか、正
7 しう仏の御心に相叶事也。いかなれは弥陀如来
8 は五劫か間思惟して、誠に難発願を發し

八十七ウ 1 ましますに、いかなる我等なれば、億々万劫か間
2 生死に輪廻して、入宝山て空手せん事、恨
3 中恨、愚なるか中の口惜事には、思召れ候は
4 すや。今は努々余念を不可思食」とて、鐘打
5 鳴、念仏すゝめ奉る。大臣殿可然善知識と思
6 食て、忽翻妄念、向西合手、高声に念仏し
7 給処に、橘右馬允公長、太刀を引そはめ、左の
8 方より大臣殿の御背に立まはり、既奉切らん
八十八オ 1 としければ、大臣殿留念仏、乱合掌「右衛門督も
2 已か」と宣けるこそ哀なれ。公長後へよるかと思

3 えしかは、頸は前へそ落にける。此公長と申は
4 平家相伝の家人也。中にも新中納言知

5 盛卿に朝夕祇候の侍也。「世をへつらふ習

6 と云なから、無下に情なかりける物哉」とそ人

7 皆慙愧しける。右衛門督をも、如先鐘打鳴

8 戒たもたせ奉り、右衛門督、善知識に向て

八十八ウ1 宣けるは、「扱も大臣殿の御最期いか、御座候つる

2 やらん」と宣へは、「目出度御座候つる。御心安被

思

3 食候へ」と被申ければ、「扱は憂世に無思置事」。

4 さらはきれ」とてきらせらる。今度は堀弥太郎

5 親経切てけり。むくろをは公長か沙汰として

6 親子一穴にそ埋ける。是は大臣殿の余に罪

7 深宣けるによて也。同廿三日、武士共三条河

8 原に出向て、頸共請取。東洞院を北へ渡て

八十九オ1 獄門の左の檣木にそかけたりける。昔より

2 卿相の位に至る人の頸、大路を被渡事

3 異国には其例もや有らん、我朝には未聞

4 先蹤。平治に信頼は悪行人たりしかは、被

5 刎頭たりしか共、大路をは不被渡。平家に

6 とてそ被渡ける。西国より帰ては生て六条を

7 東へ被渡、東国より上ては死て三条を西へ

8 被渡。生ての恥、死ての恥、何もをとらさりけり。

八十九ウ1 喜福内匠助

2 慶長拾年八月吉日

付記

愛知県立大学付属図書館蔵の慶長書写『平家物語』の翻刻を始め
てから十年の歳月が経過しました。当初、私は愛知県立大学在任中
に完成したいと考えていました。が、諸般の事情で計画どおり進ま
ず、巻第九を愛知県立大学『説林』第46号に掲載した後、一昨年
三月に退職しました。その間、『国文学年次別論文集』〈朋文出版、
学術文献刊行会〉にも各巻ごとに再録され、巻第六まで進んだ時に
佐伯真一氏によりこの本文が京師本の特徴を有することを指摘され
ました。そして、巻第四以降の巻末に「喜福内匠助・慶長拾年八月
吉日」という識語があり、価値のある古写本として同氏により『文
学・語学』（全国大学国語国文学会編）第156号の研究展望に紹
介されました。また、本書のことは同氏の校注による三弥井文庫
『平家物語』（平成十二年刊行）下巻の解説にも取り上げられていま
す。

このような事情もあり、私は以後勤務することになった岐阜聖徳学園大学教育学部の国語国文学会の皆さんにお願いして、昨年巻第十を、また本年巻第十一を、本誌に掲載させていただくことにしました。なお、この稿のファイルの作成と校正には平成十三年度国語学演習に参加した学生（三年生）の皆さんの協力を得ました。ここに記して御礼申しあげます。

〔既刊〕 愛知県立大学付属図書館蔵

慶長書写『平家物語』 翻刻

巻第一 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第41号、

平成五年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成五年、〈朋文出版、学術文献刊行会〉再録

巻第二 愛知県立大学『説林』 第39号、平成三年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成三年、〈朋文出版、学術文献刊行会〉再録

（巻第三は欠巻）

巻第四 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第40号、

平成四年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成四年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

巻第五 愛知県立大学『説林』 第41号、平成五年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成五年、〈朋文出版、学術文献刊行会〉再録

巻第六 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第44号、平成八年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成八年、〈朋文出版、学術文献刊行会〉再録

巻第七 愛知県立大学『説林』 第44号、平成八年三月刊行。

『国文学年次別論文集』平成八年、〈朋文出版、学術文献刊行会〉再録

巻第八 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第45号、平成九年八月刊行。

『国文学年次別論文集』平成九年、〈朋文出版、学術文献刊行会〉再録

巻第九 愛知県立大学『説林』 第46号、平成十年三月刊行。

『国文学年次別論文集』平成十年、〈朋文出版、学術文献刊行会〉再録

巻第十 岐阜聖徳学園大学『国語国文学』 第20号、

平成十三年三月刊行。